

慎二くん転生する 強くてニューゲーム

茶ゴス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、Extraな慎二（8歳）がStay Nightの慎二に転生するという、何処かにありそうなお話です

なお、この慎二君はExtraでは一応凄腕ゲーマーという設定もあるため、サーヴァントを使役する才能を持つと解釈し、魔術回路が存在しております故、ご注意を

目次

目覚め	決断	葛藤	再会	救出	差異	召喚	対峙	騎士	教会	開幕	同盟	会談	記憶	襲撃	宝具	再会	才能	外伝（AUOは我儘）
1	4	7	11	16	22	26	30	37	41	49	55	61	68	74	82	88	93	101

目覚め

”おい衛宮、道場の掃除しておけよ”

——なんだ、こいつは

”お前がわるいんだよ！”

——まるで子供だね。幼稚過ぎて見てられないよ

”これが、僕の力だ！いけ、ライダー！”

——借り物の力で浮かれるなんて、本当に格好悪い

——あれが僕だつて？冗談はよしてくれよ

——本当に言つてるのか？

——わかつたよ。認めてやるよ。あれも僕だつて

——何？僕だつたらこういう時どうするかだつて？決まつてる
じゃないか

「僕は、僕自身が生きた証を残す」



目を覚ませば見知らぬ天井だつた。

僕は確かたつた一人の友人であるあいつを助けるために、チート女
と対峙して、弱体化させ消えたはずだつた

自分の意識が途切れる瞬間に何か声が聞こえたような記憶がある。
その時に成長した自分にそつくりな

顔の男がださい事をしている夢を見ていたような気がする

ふと、自分の手に視線を向ける。

見覚えのある小さな手。ゲームのアバターである高校生の身体ではない、現実の僕自身の手。

なんて弱々しいんだろうか。こんな手では何もできはしないと錯覚してしまうほどの頼りない手…

どうやら、僕は死ななかつたようだ。結局は虚偽威しだつたか。やつぱりあんな簡単に人が死んじやうのは問題があるに決まつていい。大方、僕達を本気にさせるだけの嘘だつたのだろう

身体を起こす。長い眠りに付いていた筈だから、上手く動かせないと言う事も覚悟して起き上がつたのだが、普通に動いた。高校生の身体に慣れていたというギヤップは感じたが、特に筋肉が固まっているなどの障害もなく身体を起こすことが出来た。もしかして、そんなに長い間眠つていたわけではないのかも知れない。

日付を確認するために部屋を見渡すが、おかしな点に気付く。見覚えがないのだ。現実の僕の部屋とは作りからして違う。どちらかと云うと、夢でみた“あの僕”の……

そこで気付く。あの声はなんと言つていた？

”お前だつたらどうする？”

これじやあない。確かこの後、僕が生きた証を残すと言つた後…：

”なら、やつてみる”

ああ、なるほど。どうやら僕は”あの僕”になつたようだ。
不思議と混乱はしていない。あるがままに受け止めている自分が
いる。

そう自覚してから気付く、”自分に流れる物”

まさか、これは魔術回路？あの僕には無かつた筈だが……。
なんだ。根本的に僕は”あの僕”とは違うじゃないか。やつぱり
天才である僕は自分自身といえど格が違うんだろうね。

そこまで考えて、何か違和感を感じる。この僕の部屋を取り囲むよ
うにいる物に対する嫌悪感

ああ、これがあの祖父の蟲か。邪魔だなあ、はつきり言つて気持ち
が悪い。

まつたく、僕のキャラじやあ無いんだけどね。この世界の僕になつ
たからには妥協はしない。

こんなもの、少し現実味のあるゲームみたいなものだろう？

決断

夢で見た僕には妹がいた。名前は間桐桜

あの保健室のA-Iが僕の妹だなんて変な気もするけど、その妹の環境が問題だ。間桐臓硯、『この僕』の祖父に位置する男によつて日々調教される毎日。まつたく、どうもスマートじやないね。信じられないよ。養子の6歳の孫を調教する趣味のあるペドフイリアが祖父なんて信じられないね。

こんな時においつがいるのなら、桜を助けるために奮闘するんだろうか……いや、するだろうな。おいつはそういう奴だ。

例え、僕の妹があのA-Iの桜じやなかろうとも助けるために命を張るのがあいつだ。そんな事僕には到底真似出来ない。だからといってこのまま見捨てるというのも無いかな。僕に出来なくておいつが出来るように、おいつが出来なくて僕に出来る事はある。いや、寧ろ多いと言つてもいいね。それに身内の恥を放置するなんて出来ないさ。祖父がペドなんてもつてのほかだね。早々になんとかするべきだろう。

それに、おいつは最後まで僕がいてくれた事を記憶していくくれた……なら、今度は僕が、おいつがいないこの世界でおいつを知つていいる僕が、おいつがいた事を記憶してやるよ。

別に、しみつたれた友情なんかじやない。おいつを生かしたのは紛れも無く僕だ。義理を返すなんていう大層なものでもない。

ただ、僕がそうしたいだけ……ただ一人の友達を覚えていたいだけなんだ。

だから、おいつの代わりでもなんでもいい。おいつが助けようとしていた、『間桐桜』という存在を、僕が助けてやるんだ。

本格的に僕は馬鹿になつたようだ。今までの僕なら絶対にたどり着かなかつたその答え。今でも反吐が出るような不気味さだけど、そうしたいと思つてゐる自分がいる。何かを残す事しか考えていなかつた僕が誰かを残すことを考えている。

本当に滑稽だね。だからこそ、本気になれる。僕らしくない僕が辿

り着いた答え。そう簡単に破綻させるわけにはいかない

まず今の僕には頭脳はあつても、力は無い。身体は子供のまま、魔術の使い方もわからない。なら、どうするべきか。答えは決まっている

る

取り敢えず情報を纏めることから始めよう。何故かは知らないけど、僕自身が経験したことのない記憶が、僕の中には存在している。この世界の僕の事。あいつの事。インプットされたように存在する記憶を開示していく

1. • 祖父は人間ではなく、蟲の集合体である
2. • 僕に魔術回路が存在する
3. • 僕には月の聖杯戦争での記憶はあるが、あまり役に立つものではないだろう
4. • この町には最強のサーヴァントが存在する

僕の記憶にあるサーヴァントの情報で最強に位置するのは、悔しいがあいつが使役していた金色のサーヴァント、ギルガメッシュユだろう。

何故かあいつが他のサーヴァントを使役していた記憶もあるが、それはおいておくとしてだ。

この町の教会にそのサーヴァントは間違いなく存在する。

だが、問題があるとして。そのサーヴァントはすぐ気まぐれだということか。マスターだつたあいつもよく振り回されているところしていたのを記憶している。そんな奴がはたして素直に力を貸してくれるのか……難しいだろうな

だけど、僕は色んな無理ゲーをクリアしてきたんだ。今回だつてクリアしてやるさ。

難易度は極悪だけど、その分見返りが大きいなんてまさしくゲームのようだしね。

思ひたつたのなら行動だ、目指すは冬木市の教会。そこにいる麻婆

店員にはあまり見られたくはないが、とりあえずはギルガメッシュに接觸するのが一番だろう。

葛藤

幸いにも現実の僕のように家に縛り付けられていると言う事もなく、普通に家を出ることが出来た。一人で外を歩くのは実を言うと初めてのことである。どうやら、遠巻きに蟲が監視しているが、それを踏まえても今の僕は少し晴れ晴れとしていた。

電腦世界では味わえなかつた空氣を感じる。いくらリアリティに出来ていたといつても、あの身体はポリゴンの塊だ。確かに、痛覚や触覚、そのほかの感覚は存在したが、現実と電腦世界の違いははつきりとわかつた。

照りつける太陽は鬱陶しいながらも自己主張をし、気温を引き上げる。外へ出て10分程度で汗が流れてくる。

金を持たずに外出したのは失敗だつたな。あつちでは携帯端末に入つていたから、金を持ち歩くという事を忘れていた。

無いものは仕方ないと割り切り、道を歩く。

祖父の蟲は不気味な形状をしていた筈だ。ならば、人通りが多い所では、その動きを止めるとまでは言えなくとも、抑制する事は出来るだろう。溝の中に入っている事も考慮し、住宅街でなく商店街へ向かう。まずは、蟲からある程度距離を離すことが重要だ。そして、故意的だと悟られないよう教会へ向かうしかない。

商店街へ向かうにつれて周囲の活気が増えるのがわかる。それとともに、少しだけ。ほんの少しだけ離れる気持ちの悪さ。

「ふふん、やっぱり天才の僕の作戦が失敗することはないな。」

改めて僕の優秀さを実感する。だけどこで油断しちゃいけない。

慢心して失敗するなんて、3流ゲーマーのやることだ。1流ゲーマーの僕はここから更に追い込みをかける。

ここでしてはいけないこと、一つ目として教会へまっすぐ向かわない。二つ目は人の少ない所にはいかない。

問題があるとすれば2つだ。僕の体力が持つこと、教会についてか

らどう行動するか。

本当は一つ一つ作戦を考えてから行動するのが僕なんだけど、急いだ方が良さそうな気がして実行している。恐らくはまだこの事態に混乱しているのだろう。もう少し時間が欲しいところだけどそんな事も言つてられないと思う。まあ、天才の僕に出来ない事は早々無いだろう。それが例え極悪難易度でも臨機応変にするしかない。

商店街の中を通り、駅前通りへ。どうやら今日は休日だつたようで、学生の姿は見えない。まあ、通勤途中のサラリーマンとかはいるから、人通りは多い。

こんな状態を保ちつつ、折を見て教会へ向かうとしよう



教会の入り口に立つ、蟲は教会に近付く直前に一度接近してきたようだけど、すぐに距離を取つたようだ。少し不審に思われたかもしないけど、8歳の孫が街を散策して教会にきたと思つてくれるだろう。まあ、それが失敗していても、この教会で失敗しなければいいだけだ。後は覚悟をきめるしかない

——教会の扉を開いた

いくつもの長椅子がならび、奥には祭壇がある。

幸いにもあの神父はここにはいないようで、ガランとしていた。

「無人なのに鍵が開いているなんて不用心すぎるね。」

あの不気味な顔を思い浮かべ、やれやれと頭をふり、奥へ進む。何処にいるかはわからないが、ここにギルガメッシュがいる事は間違ひがない。祭壇の横にある小さな扉を開き、歩を進める

若干、先程の僕の家の廊下に似たような感覚を覚える洋風の廊下を

進み、ある扉の前で足を止める

「……テレビの音が聞こえる？」

わずかに盛れる音、他の部屋はまったく感じなかつた気配がこの中からする。

絶対的な強者の気配。そのことからも、この中にいることがわかる。

足が竦む

メルトリリスと対峙する前のような心境だ

いや、あの時はだいぶ違うのだけど、それでも足が竦む。

ギルガメッシュと対峙して果たして無事に帰ることは出来るのか

「やめだやめだ。やつぱりこんなの僕のキャラじゃない」

逃げる。
逃避する

いつかあの引きこもり女に言つたように、怖くて逃げることは臆病ではあつても、情けないなんて事はない。

——情けない

自分でもわかつて いる。僕がどんなに頑張つても出来ない事が ある事を

「おとなしく、家に戻つてゲームする方が有意義に決まつてるし」

そう言い聞かせる。

自分の逃避を正当化させるための体のいい言い訳。
でも

どうやら僕は本当に頭がおかしくなったようだ

——両手でドアノブを握る

「まつたく、それもこれも。全部あの時におかしくなったからだ」

一度死んだというのは随分と僕の性格を歪めたようだ。本当にさ

「ムカつくよ。こんちくしよう」

僕は、ドアを開いた。

再会

一人がけのソファーに、それはいた。

改めて対峙してわかる存在感。溢れ出すカリスマ性はとんでもなく、思わず跪いてしまいそうな錯覚になる。それを振り払い、眼前の存在へと目を向ける。

かつては逆立てていた金髪をおろし、あの金色の鎧ではなく洋服に身を包んだそれはわずかに顔を伏せ、何かを考えているかのような素振りをみせている。それに酷く緊張する。相手は刹那で僕をなぶり殺すことの出来る存在だ。もし失敗すれば殺されるのは明白……本当にやつてらんない

「……」

沈黙が部屋を支配する。テレビはついているが、その音がさらに僕の緊張を強くする。部屋を包む空気に耐え切れず、飾られた様々な車やバイクの模型に目をやり、少し緊張を和らげ、再度相手を見る。

相も変わらずに顔は伏せたままだが、そこから何も読み取れる事が出来ないというの~~は些~~か悔しいね。でもいつまでもこんな状態ではいけない。何よりも僕が緊張で押しつぶされそ~~う~~だから

覚悟を決めて僕は口を開く。まずどうすべきだ？挨拶をする？名前を名乗る？

ダメだ、考えてた言葉すら頭から消え失せてしまつてはいる。どうにも上手い言葉がみつからない。

「……久しいと言^{うべきか}？」

僕が頭のなかで葛藤していると、向こうが口を開いてきた。

久しい？おかしいな、この世界の僕はこいつにあつていないと筈なんだけど……

「初対面だと思うんだけど」

「何を言つている、シンジ。賢いとは言つてもやはり阿呆は阿呆か」

相変わらずの罵倒。ただその口ぶりはかつてあいつの傍らにいたギルガメッシュにそつくりで…

「まさか、ムーンセルでの記憶が……」

「我を誰だと思っている？ どう何人もこの英雄王がいてたまるか」

どうやら、僕以外にもあの世界の記憶を持つものがいたらしい。随分と早くに見つかったが、それはおいておくとしてだ。これで、少しだけ生存率は上がった。話をする前に殺される可能性もあった。その懸念は無くなつたと言つてもいい。

「して貴様はいつたいどういつた了見でここに来た？ 我が許可する。答えてみよ」

こいつの機嫌を損ねるのは悪手だ。あいつが言つていたとおりに、こいつが聞いてきて、こつちが答えるとしていれば、少なくとも殺される心配は少ないはず

「……桜を、間桐桜を助ける手を貸してくれ」
「……」

あーあ、言つちやつた。少ないと言つても、無いわけではない。そのまま僕の首が飛ぶことすらありえる。本当にいつからこうなつたんだろうね。僕は……

「…貴様は人助けをする人間だつたとは記憶していないが？」
「はつ、英雄王ともあろうあんたが、気付かないなんてね。」

口調は強がり。今の僕は不敵に笑えているだろうか。震えてくる足を必死にとめて、なんとか気持ちだけは強くあろうとする

「……間桐桜：か。見えたぞ、貴様の目的が」

「……」

「大方、あの者が存在しないこの世界での者に成ろうとでも言うのだろう？」

「違う！」

大声を上げて否定する。なんで僕があいつにならなくちやいけないんだ？そんなの願い下げだよ。あんな命知らずになるなんて考えたくもない。まあ、最近の僕もあいつくらい馬鹿みたいだけどさ

「ほう？」

興味がわいたように目を細めてこつちを見てくる。本当にムカつく奴だな。あいつもサーヴァントも。こつちは内心震えてるつてのにそんなもの気にもとめずに見てくる。本当に嫌なやつだ

「興が乗った。手を貸してやらん事もない。だがその前に貴様がらしくない行動をしようとする理由を述べてみろ」

「あいつは、僕が存在していた証だ。でもこの世界であいつがいたつていう証なんてない。だから、今度は僕が証明するんだ。あいつが：岸波白野は存在していたって！」

「……それは友の為か？」

「笑いたければ笑えよ。僕だつてこんなキャラじやないのはわかってるけどさ。初めての友達だつたんだ。そいつが存在しないなんて認められるわけないだろ」

本当に僕は何を言つてゐるのだろうか。ただ、僕がしようとした事は単純なことなんだ。ただ、あいつがいたつて言うことを覚えるため

に。あいつの所業を残す。ただそれだけなんだ

「あいつは桜を助けようとしてたんだろう？例え違う桜でもさ。たつた一人の友達の願いを叶えてやる程度簡単にこなさないと、僕らしくない」

「……貴様を見ているとあいつを思い出すな」

ふと、英雄王は僕から視線を外してそう呟いた。その顔は少し笑つてあり、彼もまた一人の人物なのだと証明しているようにそれは美しかつた。僕が「あいつ？」と聞き返すと「戯言だ」と口を開け、英雄王は腰をあげた

「さて、では行くとするぞシンジ。先に表で待つていろ」

そう僕に告げて英雄王は部屋から出て行く。僕はそれに一瞬思考を止めたが、戦力の確保に成功したのだと理解し、改めて僕の優秀さに戦慄し意気揚々と外へ向かつた。



教会の外へ出てから5分位してそれは現れた。

黄色のバイクを引っ張り出してきたあいつは僕に後ろに座るように言うとそのまま自身もバイクに跨つてアクセルをふかす

「ちよ、ちよつとまでよ。ヘルメットはどうしたんだよ！」

「はっ！ 我にそんなものなど不要！」

「交通違反だろ、それ！」

「我がルールだ！ そんな物は知らん！ 振り落とされたくなればしつかり掴まつていろ！」

そう言い捨て発進した。8歳児になんて無茶を言うのだこのサー

ヴァントは。本当に破天荒であるそれに、あいつが英雄王ではなくA U王だと嘆いていたのが理解できる。こんな奴が人類最古の王など、なんて嘆かわしいんだ

こいつがギアを上げる度に加速していく中、流れていく景色を見る余裕もなく必死にしがみつく。

優に法定速度を超えているであろうそれに、恐怖すら感じなくなつた時辺りだった。普通ならバイクの音で聞こえないであろう筈の声が何故か聞こえたのは

「ようはあの蟲共を滅すればよいのだろう?」

嫌な予感がする。身体は英雄王にしがみつきながらも、顔だけを後ろに向けた

何百という武器が波紋とともに見えた。それはこの速度と同じ速度で追従してくる。

「ちょ! 魔術は秘匿にしないと!」

「そんな物は知らん! 射出!」

背後から光の筋が飛んで行く。それを見て軽く現実逃避してしまう僕を誰が悪く言うのだろうか

【その日、昼間だというのに流星群が冬木市でみれたという噂を聞いたのは、5日後のことだった】

救出

まさしく圧巻だった。降り注ぐ剣は街に拡がる蟲を滅したのだろう。辺りに感じていた嫌な気配も消えた。

そして英雄王は気分を良くしたのか更に速度を国道を走る。少しでもバランスを崩せば大事故になつてしまつてあろうバイクを巧みにあやつり、10分程度で到着した間桐の屋敷。

街では消えた気配も流石にここには残つており、心なしか焦つている印象をうける

「ところでシンジよ。お前は魔術を使えるのか？」

バイクから降り、震える足をどうにかしようとバイクに手を付いている僕に英雄王は訪ねてくる。正直に言うのは悔しいが、こいつに嘘をつくのは得策ではない。仕方ないけど本当のことと言葉にする

「いいや、使えないね。魔力はあるみたいだけど使い方がわからないよ」

「ふむ……なるほどな。一度試しにコードキヤストを唱えてみるのはどうだ？」

「まあ、いいけど」

こいつは一体何を考えているんだ。コードキヤストは端末内の礼装を媒介に発動する魔術だ。そんなものを唱えても何も起こらないだろうに……まあ仕方ない

『view_map()』

そう呟くと同時に頭の中に入り込む情報……これは、あの電子世界で体験した魔術だつた

辺り一帯の情報が頭の中に映し出される。間桐の屋敷の全貌が、

地下への入り口が、地下でうごめいている蟲が、蟲の集団の中で倒れている桜が、そして何故か苦い顔をしている祖父が全て目にとれた

「これは…」

「やはりな。発動出来たようだな」

「でも、僕は礼装なんて一つも！」

「そのポケットに入っている物を見てみろ」

英雄王は視線だけこちらへ向けてそう呟く。ポケット？ 何も僕は入れていなかつた筈だけど…

しかし、足の感覚が無いため気付かなかつたが確かにそこには入つていた。

【あの携帯端末が】

「どうして、これが…」

「先程教会を出る前に我が入れておいたのだ。感謝しろよ？ 我が物を贈るなど滅多に無いことだ」

視線を間桐の屋敷に向けた英雄王は悠然と語る。さすがは王であると言つたところか。王の霸気が溢れでているのがわかる。

「でも、何故この世界に端末があるんだ？」

「我の蔵は全ての原典を内包している。そのような人が作つたものなどあるにきまつてゐるだらう」

なんというとんでもない宝具なのだろう。確か、【王の財宝】という名の宝具だったか

？まさかここまでの物だけは思わなかつた。あいつが何でもないよう言つてたから凄いものだけは思わなかつたぞ

まあいい。端末の電源を付けて情報を確認する。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

間桐慎二

M a s t e r L e v e l 1

M P 2 8 0 / 3 0 0

ス kill ポイント 0

経験値 0

E Q U I P A L L

サー ヴアン ト U n k n o w n

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「この 我が 設定 した のだ。 まあ ただ 全て の コード キャスト が 使える だ
けで、 ステータス 強化 は どう に も な らなかつた の だ が な」

本当に この 英雄王 は とんでもない やつ だ な。 よくこんな 奴 の マス
ター を し て た な。 あいつ は

「まあいい。 本當 は こ んな のは 嫌 なん だ が、 ある もの は 使わせ て も
らう よ。」

「では、 蹤躡 と 行 こ う か。」

「ああ、 地下 へ の 入り 口 は わかる か？」

「無論、 貴様 が 案内 しろ

。 特別 に 我 の 前 を 歩く のを 許可 し よう」

本当に 普通 に 言え ない のか、 こいつ は
まあ、 いい ん だ が どね。 こ んな に 上手く 事 が 運ぶ なん て 流石 の 僕

だつてことすら言えないよ

「じゃあ、ついてきてくれ」



暗い世界だつた

もうどれくらいの時間が立つたのだろうか
時間間隔が狂いそうな部屋で蟲に侵されて、体内に巣食われて
感情など、とっくに薄れて

ただ客観的に見て いる私がいる

ああ、今日も犯されるのか。そう他人ごとのように思えてしまう
救いなどあるわけがないと知っていた
助けなんかくるはずがないとわかっていた

それでも、その日はお祖父様の様子がおかしかった

何か焦っているようでしきりに蟲に指示をとばす。その度にさら
に焦っていく

体内的蟲達も様子がおかしい。いつたい何が始まるというのか

そんな疑問をもつたまま倒れ伏す私の耳に、すさまじい音が入つて
きた

何かを破壊するような音。その音はどんどん大きくなり、近づいて
くるのがわかる。それと比例してお祖父様の顔色は悪くなつていく。
まるで、何かを恐れているかのように…：

そして、音が途切れたと思つた

瞬間、部屋の入口が爆音と共にふきとんだ。

崩れたドアの向こう側には2人の男がいた。背の高い金髪の外国人と…この家に住む義理の兄

それを見たお祖父様は兄に怒号をあげた。

”何故貴様がこんなことを!”

”儂が育ててやつた恩を忘れたか!”

まるで何かを紛らわすかのように吼えるお祖父様を見て酷く滑稽のように思えた。兄はそんなお祖父様を気にも止めずに高笑いをする

”いつからお前は自分が強者だつて思つていた?”

”いつから自分は死なないと思つていた?”

”化け物になつてまで生きながらえるなんてナンセンスだよ。それが僕の祖父だなんて考えられないね”

初めて見た時では考えられないような口調で話す兄、その言葉が紡がれる度に顔を怒りで歪ませていくお祖父様

”貴様!”

”自分の安全が保証されている戦いしか出来ないなんて、2流ゲーマーだね。1流ゲーマーならもつと自分を護るための戦略を考えるんだよ”

兄へ向かう蟲達を剣が貫く

金髪の男の後ろに現れる無数の剣にお祖父様は顔を恐怖で染めて

いく

”何故じや！儂は間桐の繁栄のため、全てを犠牲にしてでも間桐のために！”

”喋るな、雑種。王の前であるぞ”

”何故貴様がでしゃばる！ギルガメッシユ！”

お祖父様に剣が突き刺さる。お祖父様はうめき声をあげて地面に這いつくばっていた。お祖父様はいつも私をこんな目で見ていたのだろうか。そうなれば、すぐ滑稽だったんだ

”儂が、どうしてこんな目に”

”貴様は手を出してはいけない物に手を出したのだ。あやつが守り通そうとした存在にな”

”ぐううう”

”塵と消えよ”

お祖父様だけでなく、周りの蟲にも剣は突き刺さる。それを見た兄の笑顔は少し歪であつた

そして、金髪の男がこつちに近づいてくる光景を最後に、私の意識は途切れた

差異

桜を救出してから早いもので9年がたつた

学校に行つたことのなかつた僕は周囲のレベルの低さには心底驚いた。勉強面に関しても運動面に関してもレベルが低すぎるのだ。高校生になつた今でもそれは思う。

入学時には競おうとする相手もいたものだが、大抵の奴が暫くすると僕とのレベルの差を実感し諦めていく。そんな僕を見て何を思ったのか大勢の女が群がつてきていた。

夢での僕は少し優越感に浸つていたようだが僕は違つた。こんな奴らを相手にするくらいなら更に僕を高めたいと思う。聖杯戦争での記憶のせいいかはわからぬけど、周りが幼稚に見えたのも要因の一つだろう。あいつなら一緒にいても目障りじやあなかつたな

そんな僕にも敵わない奴はいた。衛宮士郎：弓道ではいくらやつてもそいつには勝てなかつた。だから僕は部活は弓道部に入り、弓の腕を鍛えつつ競つていたが、あろうことか衛宮は弓道部を退部。対する僕は副部長となつた。

夢ではそれに鼻をかけよく衛宮を挑発していたけど、結局のところ。夢での僕の唯一の友達だつたのだろう。どんだけ言つても許してくれる衛宮に甘えていた夢の僕は、幼稚だとは思うけどね。

いつか衛宮を弓道で負かすという事は決定事項として、次に気に入る奴はいた。遠坂凜だ

はつきりとは覚えていないが、外見的に見れば月の聖杯戦争との違いは胸だろう。もしかして自分のアバターのバストあげていたんじゃないかな？もしそうだとすれば哀れな奴だな

夢の僕はこの遠坂に告白して振られたような関係だけど、僕と遠坂は違う。間桐家当主と遠坂家当主のライバルのような物と言つたらいいのだろうか。魔術面では互角だが、あいつは少しうつかりをやらかしたりする事を考えれば、勝つても言えるのかも知れない。勉

強面、運動面は僕のほうが上だ。これなら月の遠坂の方が頭がいいんじゃないか？と何度も思つた事だろうか。

桜は最初の数年は感情の変化も乏しく、笑つたり泣いたりすらしなかつたが、ある日桜と買い物に出かけた時に、バイクに乗った英雄王が颯爽と現れ僕達を拉致。

教会の愉悦部と書かれたプレートを貼つた部屋に連れて行かれた。そこには、【愉悦部部長】と書かれたプラカードを首にかけ、見ているだけで痛みを覚えそうな真っ赤な麻坊豆腐を食べる神父の姿が。

それに啞然としている僕と、何を考えているのかがわからない桜に【愉悦部平団員】【愉悦部ますこつと】と書かれたプラカードをそれぞれ僕達に渡してくる英雄王。

僕達がプラカードを受け取ると首にかけた【愉悦部顧問】と書かれたプラカードを揺らして高笑いをする英雄王は本当に英靈なのだと考えさせられた。

だが、その時に何故かはわからないが桜は笑つた。初めて見た桜の笑顔に何故か照れくさくなつてそっぽを向いた記憶がある。

それ以降桜はゆつくりとだが感情を表すようになり、今では衛宮の家に通い料理を習つてるそうだ。

衛宮はいいやつだが、あの自己犠牲の塊に恋をするのはやめておいた方がいい、と口走りそうになつたが、よくよく考えてみるとあいつも中々に自分を省みない奴だつた事を思い出し、結局のところ桜が恋をするのはそういう奴なんだと自己完結し、見守ることにした。

それからもちよちよく英雄王に拉致され、望んでもいない部活動に励んでいる僕はある日愉悦部部長からこう告げられた。

「聖杯戦争が始まる。間桐家として出場するのならばサーヴァントを召喚するのだな」

それを聞いて僕は少し狼狽した。また聖杯戦争が起ころ……8歳で経験した聖杯戦争とは違うがそれでも僕にはある記憶が蘇る……僕の身体が”消えていく”感覚

もう乗り越えた筈だつた。忘れてはないが克服した筈だつた。

それでも、僕の身体が震える。またあの”殺し合い”をしなければならないのか……そう頭で理解し、身体は正直に怯える。

なんて情けないんだろうか。そう自虐し、こみ上げてくる恐怖に薄ら笑いを浮かべた

そんな僕に気付いたんだろう、一緒に拉致されてきていた桜はこう告げた

「私が、聖杯戦争にでます」

驚愕した。幼少時の事を考えれば魔術に関わりたくもない筈なのに、桜は参加を表明した。

確かに魔力の量は僕よりも多いがこれまで魔術から離れて暮らしてきた桜に、果たして聖杯戦争を生き残る事が出来るのか……否。で起きるわけがない。

少し桜の手が震えているのがわかる。やはり桜も怖いの・だろう。

そして思考した……

ははっ、本当にばかみたいだ。桜を護るためだと考えれば途端に参加しないという選択肢が僕の中から消え去つた。本当にどうしちやつたんだろうか、僕は。

他人に自分勝手にあたりちらしてるのが僕らしいのに、こんな義妹の為に何かをする人間なんて僕らしくない。

本当に、馬鹿みたいだ

震える手を抑えて部長に告げる

「聖杯戦争、間桐家から2人出ることは可能か?」

質問。普通ならありえない質問だが、それでも聞く。

聖杯戦争ともなれば周囲の人間にも被害が及ぶかもしれない。その時桜を護ることが出来るサーヴァントは多いに越したことはない。僕も多少なら自衛も出来るが桜は自衛なんて出来ない。それなら少しでも桜が危険にならないためには

2人で参加するのが一番良いのだ

「ふむ、それはこちらからは答えられぬな。だが一つ言えることとして、聖杯に選ばれた者だけしかサーヴァントを召喚出来ぬ。即ちその資格があるのならば2人共参加することは可能だらう」

そう告げ、麻婆豆腐を食し始める部長を横目に思考を巡らす。

今のは本当ならば召喚は試したほうがいいな。もし早い者勝ちだつた場合を考えて急いだ方がいいのかも知れない。

僕は桜を連れて部屋を出る。その際に見えた英雄王の笑みに少し不安を覚えつつ教会をあとにした

召喚

＝＝＝

一人は朽ち果てようとしていた者を見つけた

一人は魔術師の誇りをかけ、召喚した

一人はただ言われるがままに召喚した

一人は召喚の権利を強奪した

一人は常識を覆す方法で召喚した

一人は兄を助けるために召喚した

一人は追い詰められ、召喚した

そして、ここに一人さらなる召喚者が現れた

冬木市に8騎のサーヴァントは集結する

それを感じ取ったのか、王は果実酒を傾け月へと語りかけた。

”余興にしては贅沢よな”

＝＝＝

放課後、いつものように道場で弓を射る僕に美綴綾子が話しかけてきた。

美綴綾子、弓道部の部長で弓道部のくせに薙刀が得意という変わり者。

こいつは他人が弓を射ようとしている所に話しかけるようなやつではなかつたと記憶していたが：

仕方ないので構えを解き、視線を向ける

「もうあたしは帰るけど、アンタはどうする？もし残るなら教室にい

る衛宮に声かけておいてくれ」

衛宮はまた道場の掃除を引き受けたのか。

まあ、少しばかり時間を忘れて没頭してしまっていたか。どうにもダメだね、今日は早く帰るつもりだつたのに

「それじゃあ、僕もこれであがらせて貰うとするよ。良ければ送るけどどうする？最近は物騒だしね」

聖杯戦争、着々とサーヴァントが召喚されている中、一般人を巻き込む事を厭わない魔術師もいないということはない。

今の冬木市は危険ということは間違いないだろう。

「お気遣いどうも。でも大丈夫あたしがそこらへんの男に負けるとでも？」

「僕よりは弱いけどね」

「うつ」

そう、事実だ。夢での僕が大抵のことが出来たように、この僕には土台が仕上がっていた。

だからこそゲームの魂が奮い起こされ、ゲームのキャラを育成するかのように自分を高めていた

その結果、試合は殆ど参加してはいるものの大抵のやつには勝てる物となっていた

「まあ、お前が強いつてのは知つてゐるから特に心配はしていないさ。ただ女の子にはこういう気遣いが形だけでも必要だろ？」

「女の子扱いをされたのを喜べばいいのか、気遣いが形だけといふことを怒ればいいのがわからないな。」

「皆はお前を男っぽいだと姉御とか言うけどさ、僕はお前よりも姉御っぽいというかがさつというか…そういった人を知つてゐるから十

分女の子にしか思わないよ」

思い出すのはかつての記憶。僕の相棒であり、サーヴァントだった女の事だ。

もう2度と会えないかもしだいが、出来れば会いたいと思う僕はつくづく変わつたと実感してしまう。

「まつたく、そういう女殺しの台詞は違うやつに言つてやれ」「違いない。じゃあ、僕は着替えてくるよ」

そう言い立ち去る。

道着を着替えつつ今日の事を思い出す。

今日は遠坂がサーヴァントを召喚したのがわかった。姿は見えなかつたが裏口あたりで話してゐるのを見た。

不用心すぎるだろと思うな、遠坂のうつかりはどうとう治らなかつたようだね。

桜の方はライダーが守つてるから問題はない。まあそのライダーがもしものためと学校に結界を施していたな。

流石に他者封印・鮮血神殿は止めさせたが……一般人が多くいる学校で使う代物ではない

制服に着替え、鞄を担いだ僕は校門へ向かう。遠坂がライダーの結界を調べている所から察して今の間に街を散策したほうがよさそうだ。

僕が知っているマスターは3人遠坂凜と衛宮士郎そして、言峰綺礼だ。

まだ衛宮は召喚していないという事を考えてもしかしたら僕が召喚したせいで衛宮は召喚出来ないのかもしない。

むしろ、衛宮が召喚した理由はなんだ？

コンビニに入り軽い食べ物を買いつつ思考する。

あいつは遠坂のような魔術師の誇りだとかを謳うやつじゃないのはわかっている。

どちらかと言うとヒーローの方があいつは好きだらうな。
そんな衛宮が召喚した理由：何か嫌な予感がする

学校の遠坂の様子を見に行くか。

”

「（お前、僕を馬鹿にしているのか？流石にサーヴァントに生身で対峙
しようと考へるほど自惚れていないよ）」

”

「（保険：ね。確かにそれは必要かもしね。じゃあ頼むよ）」

”

「（ああ、そいつがいいだろ。なにせ初戦闘になるかもしね）」

”

「（じやあ、行こうか）」

対峙

嫌な予感がした。ただそれだけで学校へと向かう僕を馬鹿だと思う奴はいるのかも知れない。

胸騒ぎがした。ただそれだけなのに危険地帯へ向かう僕を貶す奴はいるのかも知れない。

それでも、僕は向かう

「view map()」

魔力を消費し魔術の発動。周囲の情報が頭のなかに現れる。2つ並んで動く物体がある。遠坂凜とアーチャーだ。

方角的に見て遠坂邸に向かっているようだ。それよりも学校に近い位置に衛宮の反応がある。どうやら特に問題はなかつたらしい。

いや、負傷しているのか？酷く歪な歩きだ。まさか遠坂が？

それはないか。一般人を巻き込むような真似は遠坂はしないだろう。じやあどうして負傷している？聖杯関係ではないとすれば御の字だけど：

「様子を見に行つたほうが良さそうだな」

衛宮と敵対するつもりは今のところはないが、もしサーヴァントを召喚して攻撃してきたのなら応戦する必要がある。極力魔力消費を抑えるしかないか。

ここにはエリクサーみたいな便利アイテムなんか存在しないのだから

” ”

「ああ、様子見が主な目的だよ。」

”

「お前がそれを言うか？」

　　”

「事実だ、受け入れろ」

魔術がきれる前に桜の居場所を特定する。

間桐の屋敷へ向かっているようだな。ライダーも傍らにいる事から危険は無さそうだな。

衛宮の家に向かう。もし、衛宮の負傷がサーヴァントによるものだつたとしたら、目撃者である衛宮を消しにくる可能性は高い。まったく、損な役回りだね

◇

衛宮の家の前で衛宮と出会う。タイミングは良かつたようだね、案の定負傷していた。

心臓部に当たる場所に穴、その周りに血がある。間違いなくサーヴァントのしわざだ。

「慎二、こんな遅くにどうした？」

「衛宮こそ、随分遅かったようだな。今まで道場を掃除していたのかい？」

その言葉に苦い顔をする衛宮。なんだ？僕を疑っているのか？失礼なやつだな

「どうでさ、その傷は大丈夫なのか？血がついてるけど」「あ、ああ。平氣だ」

嘘が下手だなこいつは。視線があからさまに泳いでいるぞ

「た、立ち話もなんだ。入れよ、茶くらい出す」

話をぶつた切る衛宮。よほど聞いてほしくないよう見える。
ここで追求するのは逆効果だな。

「まあ、そうだね。お邪魔させてもらうよ」

衛宮は中に入る途中、少し顔を歪めるとそれを振り払うかのようにな
中へ入った。

どうやら、僕のサーヴァントに反応したんだろうな。これでさらに
警戒されるか…まあ、いいけど

衛宮の家には侵入者探知用の結界が張られているのは知っている。
何度か訪れた際に気付いたが中々に高度な魔術だ。

こんなもの、衛宮に使えるとは思わないが…今は助かつている。
侵入者に気付けるのなら不意打ちはされないから。

「で、慎二はどうしてこんな時間にうろついてたんだ？」

「ああ、少し桜と喧嘩してね。今日一日は誰かの家に泊まろうかと思
っていたのさ」

「誰かつて…？」

「そう、お前だよ。だつてお前の家広いし」

「まあ、いいんだけどよ」

後で桜にメールしておかないと。じゃないと怒つてきそうだ。
ふと、机の上にある皿に目が行く。どうやら桜が用意したものみた

いだな。僕の妹ながら献身的な

「まあ、夕食は気にしないでくれ。既に軽くすましてきたから」「俺の家にくるのなら別に食わしてやつたのに」

「流石に桜に悪いからな。断らせてもらうよ

「ーーっ!!」

突然衛宮が何かに反応した。

誰か侵入してきたのか？悪い予感はあたつてほしくなかつたんだけど。一体何時から僕は未来が読めるようになつたんだ

「慎二、どこかへ隠れているんだ」

こいつは何を言つているんだ？ああ、僕が魔術師だつて知らないのか。知つてるのはこつちだけと。

まあ、どうでもいい。こいつが死ぬのは少しばかり困るからね。競争相手がいなくなるのもそうだけど、なによりも桜が悲しむだろうな。せつかく戻った感情を悲しみで埋めるなんてあんまりじやないか

「いいや、隠れるのはお前のほうだよ。衛宮」

その言葉に衛宮は立ち上がり、興奮して叫ぶ

「冗談じゃないぞ！今この家には
「胸の傷を受けた奴がいる…」

「っ!!」

ビンゴ。図星というか正解をつかれてたじろぐ人つてのは滑稽だ

ね。まあ、そんな事よりも

「あーあ、本当はあたつてほしくなかつたんだけどね。まあ、僕の予想が外れるなんてそういう無いけど」

「慎二、お前は…」

「生憎と僕は関係者なんでね。こうして無関係者である衛宮が狙われると踏んで助けに来たつてわけ。感謝しろよ?」

「いつたい、何の…」

こんな悠長に話してる余裕なんて無いだろうに。

衛宮を蹴り飛ばし、僕もその反動で後ろに下がる。

「ぐあつ！」

先程まで衛宮が立つていた場所に槍が刺さっていた。本当に勘弁してくれよな

「衛宮、お前は何処かへ行つていろ。こいつの相手は僕がする」

「慎二、お前は!!」

「僕は大丈夫だから、寧ろお前が邪魔なんだよ」

「なっ!!」

なんで驚いてるんだよ。当たり前だろ？一魔術師がサーヴァントに敵うわけがない。むしろ足手まといだ。

サーヴァントを従えてる奴じやないと話にならないよ

「まあ、お前が逃げるくらいの時間は稼いでやるよ。その隙に準備するとかしてな。今のお前にここにいる価値はない」

「くっ!!」

走り去る衛宮。どうやら藏に向かうようだな。何か隠し球でもあ

るのか…気にしてもしょうがないか

「というわけで、僕が相手だけどいいかい？」

「本当はあの坊主を先に始末したいんだけどなあ。まあ、2人目のマスターの情報が手に入るのなら少しくらい順番が変わつても構わないだろ！」

「随分と好戦的だね。その槍を見る限りランサーと見たけど…」「正解だ！」

獰猛な目でこちらを見てくるランサー。僕だつたら1合も打ち合えないであろう、その胆力は計り知れない。

まあ、僕が戦うわけじやないからいいんだけど

「じゃあ、庭に出ようか。無駄に物を壊すよりはマシさ」「へっ、好きにしろ」

結構いいやつだな。こいつのマスターは正直腹が立つけど



「どつととサーヴァントを出しな。それくらいは待つてやる」

この言葉、戦いが好きな戦闘狂か。こういう相手だと策略で倒すほうが楽なんだけど……

仕方ない。ここは純粋に戦うとしよう。頼むよ

「こい、”セイバー！”

魔法陣が現れその中にサーヴァントが現れる。赤い服に身を包んだ男装の少女…：

セイバーが剣を構えて立っていた

「うむ！余に任せとおけ」

「はつ、よりによつて最良のサーヴァント、セイバーか。相手にとつて不足なし！」

「此度は余の独壇場である。一度倒した貴様などに負けるわけがなかろう！」

「意味がわからんねえ」と言つてんじやねえぞ！」

両者は同時に地面を蹴り敵へと接近する

騎士

セイバーとランサーが対峙する。セイバーは原初の火を、ランサーはゲイ・ボルグを携え眼前の敵を補足する

「わかつてているとは思うけど、相手に宝具を発動させたらダメだぞ」
あの槍は必中の槍。発動した時点で因果を歪めて心臓を貫いたという結果を残す宝具。こと対人戦において強力なものであるのは間違いない。

セイバーは一呼吸おいて、わかつていると反応し剣を強く握る。

「戦闘は任せた。僕は補助に回る」

僕がそう言うとセイバーは一足でランサーへと接近する。
敏捷値では向こうのほうが上、故に先手必勝を狙つたというところか。

ランサーは槍を突き刺すといった形で迎撃してきた。

「甘い!!」

槍をいなしその勢いで斬り付ける。すこしばかりだが、確実にダメージを与えた。

槍でガードの構えをとるランサーに今度はセイバーは剣を振りかぶりガードの上から攻撃する

「がはっ!!」

ガードは崩れ、大剣がランサーの肩を斬り付ける。

それでも致命傷とはいはず、ランサーはその槍をくるりと回し、その勢いでセイバーへと攻撃する。

「shock (32)」

コードキヤスト、相手の動きを一時的に止める魔術を発動。その隙にセイバーは再度ランサーを斬り付ける。今度は胸部しかし、ランサーはわずかに身体を動かし、また致命傷となるのを避けた。

ろくに動かないはずなのによくやるよ

だが、セイバーはそこで止まらない。更なる攻撃、上からの振り下ろしにより、ランサーの肩から斜めを大剣で切り裂くことに成功した。

ようやくの大ダメージ。普通ならもつと弱らせれるはずなんだけどね。相当の使い手のようだ

「ちつ!!」

ランサーはバックスッピで距離をとりこちらを睨む、マスターがないから良かつたものの、マスターと一緒に相手することになつたら相當に厄介そうだ。

「へつ、随分とマスターとサーヴァントの連携が上手いじゃねえか!」「当たり前だ!」

まあ、確かに当たり前だろうね。少なくとも僕たちは聖杯戦争経験者だ。だからこそ戦闘における役割を理解してる。1体1なら早々やられはしないよ

「まあ、俺としても本気で戦いてえが、今は様子見ですましてやるさ」「弱い犬程よく吠えるつて言うのは本当のようだね」「犬つて言うな!!」

なんだ、禁句だったか？軽い挑発のつもりだったんだけどつと、何か接近してくる気配が…

「はあああああああ！」

「ちつ！」

突然何者がランサーへと不可視の剣を振り下ろした。ランサーはこれを回避、衛宮の家を囲む堀の上に着地したようだ。それにもしても、やっぱり衛宮も召喚したのか…

「セイバーが2人だと!? いつたいどういう事だ!!」

僕の眼前に佇むのは2人のサーヴァント、赤を基調としたセイバーに青を基調としたセイバー

2人のサーヴァントがランサーを睨む。

いや、赤い方は戦闘が邪魔されて少し不機嫌みたいだ。

「何にしろ、この状況は不利だな。どうやらあの坊主もマスターになつたようだし3人の情報を持ち帰れば上々だろ。」

ランサーは堀から姿を消すかのように消えた…恐らくはセイバーが2人という事態も報告されるのだろうな。

そう考えつつ、思考を切り替えようとしてきた時だ

「お前たちは、何者だ」

青い方がこちらへ不可視の剣を向けてきた。

うわあ、正直ないわあ

お前のマスターを助けたの僕達だぞ？

それに剣を向けるなんて騎士の風上にも置けないんじゃないかな？

?

ガウエインは違う意味でだけど、円卓の騎士つておかしいんじゃないの？

「まつてくれ、セイバー!!」

ようやくマスターのご登場か。蔵から這つて出てくるのは中々に滑稽だね。衛宮

「何故ですか？マスター。この者達は敵です、剣を止める必要がありますか？」

「こいつは俺を助けてくれたんだよ！」

「……仕方ありません。ここは見逃します」

なんだ、騎士つてのはみんな頑固者だと思つていたけど案外そうでもないのかな？

それにもしても、2人のセイバーか。遠坂あたりが知つたら荒れるだろうなあ

「何でセイバーが2人もいるのよ!!!」

あ……

教会

現在僕は衛宮の家の居間の机に肩肘を付けて険悪な様子の遠坂とそのサーヴァント、衛宮のサーヴァントを眺めていた。僕のサーヴァントはどうしたつて？靈体化してゐるよ

台所へ目を向けると、衛宮が何かを作つてゐる。あいつ今日殺されたんだろう？鈍いんだか肝が座つてゐるのかわからない奴だな。

視線を再度険悪な方へ向ける

。まあ、確かに聖杯戦争でマスター同士が仲良くなつてのは出来ないだろうけどさ。もう少し柔軟に出来ないのか？

仕方がないから口を挟むか

「ああ、遠坂。一ついいかな？」

「……なによ」

いつもの優等生の皮を脱ぎ捨てててゐるのか、不機嫌な様子を隠すまでもなくこちらを睨んでくる。

イラつくけど我慢だ。幼稚な奴にいちいち腹を立ててたら身が持たない

「お前さ、自分が何やつたかわかつてんの？」
「……何のことかしら？」

苛ついてるためか少し刺のある口調になつちやつたけど、及第点だよね。まあ、続けるか

「聖杯戦争での一般人を巻き込んだ拳銃敵サーヴァントに殺される。」

「……わかってるわよ、そんなこと」

「いいや、わかつてないね。お前さ、冬木市を治める遠坂家人間だろ？それなのに冬木市民守れてないじやないか。他の奴だつたらまだ

しもさ、お前は絶対に守らなきやいけなかつたんだよ」「

僕の言葉に萎縮していく遠坂、遠坂のサーヴァントは無表情だが衛宮のサーヴァントは何を思つているのか僕の言葉に耳を傾けてるようだ

「僕だつてさ、流石に全員を守れとは言わないよ。出来ないだろうしね。でもさ、目の前の奴くらいは守れよ。お前だつたらそれくらいの技量はあつて然るべきだ」

「言いたくはないけど遠坂は間違いなく魔術の天才だ。僕に匹敵すると言つてもいい。

でも、それでもだ。これだけは言つておかないといけないんだよね

「うつかりも大概にしておけよ」

「……わかってる…いいえ、わかつたわ。うつかりなんて優雅じやないものね」

【常に優雅たれ】だつたか、遠坂の家訓は

まつたく、優雅に生きたいのならもつと先のことまで読むべきだよ。とはいえ…

「わかつたのなら僕からお前に言うことはない。じゃあ次、衛宮のセイバー」

「……さつきは驚きのほうが大きかつたから聞けなかつたけど、どうして2人もセイバーがいるのか説明してもらうわよ？」

「いぢいち口はさむなよ…まああれだね、僕にわかることはないってのが正しいかな」

「……」

文句はないようだ。普通に考えたら絶対にわからないから仕方な

いつちやあ仕方ない

「で、話を戻すけど。セイバー」

「……なんですか」

「仮にもマスターの恩人にそこまで警戒するのは失礼だと思うんだけど」

「それは…そうですが」

「まあ、仕方ないか。で、お前は何がしたいわけ？」

率直に疑問を聞く。こいつは典型的に戦争に勝つことに重みを置いているサーヴァントのようだ。

マスターの事を考えてるならこんな行動には出ないだろうしね

「……敵であるマスターへの警戒ですよ」

「それが非合理的なんだって」

「……どうしてですか？」

「まず最初に、衛宮は聖杯戦争の事をよく知らない」

指を1本立てる。台所の方で衛宮の声が聞こえた気がしたけどとりあえず無視しておく

「次に、遠坂達の敵意は薄い」

流石に無いとは言えないけどさ。比較的友好的ではあると言えるセイバーもそれはわかっているのか顎に手を添えて思考している。考えなしではないのは良かつたよ

「で、最後。衛宮は弱い」

これが一番の理由だね。衛宮の魔術は随分と歪で戦力としては考えない方が良さそうだ

立っている3つの指越しから衛宮のセイバーはこちらを見る。後ろで衛宮が両腕両膝ついてる気配がするけど気のせいだろ

「つまり…同盟を組めと?」

「そこまでは言つてないさ。まあ、取り敢えずは聖杯戦争について教えてくれる奴のところまで一緒に行つたらいいだろ。」

詳細を聞くことで心構えも変わるだろうし、参加したくないのなら教会で保護される事も可能だ。マスターの事を考えるのなら、いい策だとは思うけど

「……私としては、不満ですが……」

勝利に固執してるのは、こういう輩は少し崩したらあつという間にやられるから、僕としてはラッキーなんだけどさ

今回だけは衛宮の事優先してやるか

「衛宮はどうする?…どうせ遠坂の事だから、お前を教会に連れて行くと考えてるだろけど」「どうせって何よ、どうせって」

図星だろうに…まあいや。未だに頑垂れている衛宮の横腹をついて意思を確認する

「くすぐつたいぞ、慎二」

「早く言わないと蹴るよ」

「酷くないか!？」

思わず溢してしまった言葉に、慌てたように後ずさる衛宮。冗談で蹴るモーションに入ると、衛宮のサーヴァントから殺氣を感じため、構えを解いた

「で、どうする？」

「俺としては遠坂について行く方がいいと思う。俺はいまいちわかつてないから、知つておかないといけない気がするんだ」

気がするじやなくて、その通りなんだけさ。

立ち上がった衛宮の横に立ち、遠坂へと視線を向ける

「というわけで、今からここにいるメンバーで教会に向かうんだけど、何か質問はある？」

「少しいいかしら？」

「なんだい？遠坂」

「実はさつき、この家に来る前にアーチャーが、2体のサーヴァントと1体の正体不明の気配を感じ取つたらしいんだけど：慎二、あんたわかる？」

「そんなものの僕は知らないよ。」

「……わかつたわ」

「次は私から質問いいかな？」

いや、遠慮したいんだけど：遠坂のサーヴァントから聞かれることなんてろくな事じや無さそうだし

まあ、ここで断るのは無理か

「君のサーヴァントの姿を私も確認できないのだが、どういう事だ？」

「おいそれと敵に手札をみせるわけ無いじやないか」

「……把握した。」

そう言い、遠坂の後ろに控えたアーチャーを確認した後、衛宮たちの方へ視線を向けるが、特に聞くことはないらしい

「じゃあ、行こうか。」

◇

出る直前、セイバーが靈体化出来ないという異常があつたが、合羽を被るという起点でなんとか教会に辿り着いた。

夜遅くに高校生の男女3人に雨合羽を来た不審者1人……傍から見たら怪しいだろうな。

そう思いながら教会の扉を開く。

中には誰も居ないようで、遠くに聞こえるモーター音から、A U王がまた車の映像を見ていることがわかる。

遠坂にはテレビの音が聞こえていないようで、何の疑問も持たずにつかずかと教会内へ入っていく

「綺礼いる？」

少し大きめの声を出す遠坂。ここでやつと気配を感じ、こちらを見ているのがわかつた

「いないわね？じゃあ帰りましょ」

どうやら遠坂はここにはいたくないらしく、すぐにつちらへ歩いてきた

いや、言峰綺礼に会いたくないようだ

だけど、もういるんだよなあ

「そちらから呼び出しておいて出ていこうとするとは」

「あら、いたのね。綺礼」

暗闇から姿を表す神父。どこのホラー番組だよと内心思いながら、僕は近付いていく

「ふむ、お前も一緒だつたか。ここで一つ占いのようなことを言つてやろう」

「なんかすゞい嫌な予感がするから、言わなくていいよ。」

多分手遅れだな。あの顔はよくAU王も浮かべる笑みだ。
愉悦笑いはほんとどうにかしろよな

「先程、顧問が興奮しておつたのでな。恐らくは拉致されるであろう」「言わなくていいっていつたんだけど!?それに占いじゃないよね!?それ!？」

今度はいつたい何をするつもりなのだろうか。AU王の相手は精神的にも肉体的にもつかれるんだよ

「?いつたい何の話?」

「……遠坂には関係ない話だよ」

「確かにそうだけど、その言い方は腹が立つわね」

「そうおつかない顔はしないでくれよ。怖いからさ。あと僕も聖杯戦争に参加するよ。」

「了解した。今夜全てのサーヴァントが揃い聖杯戦争が開始されるのはわかっているだろうな?」
「もちろん。」

そう言い、その場を後にする。

この後待つてゐるであろう面倒事に肩を落としつつ外へ向かう

暫くは一人でゆつくりしたい

戦争に参加する事となつた衛宮達にすれ違いざま同情の視線をむ

けるが、わからなかつたらしい。2人共首をかしげていた

まあ、いいんだけどね

開幕

教会の外にあるベンチに座つて衛宮達が出てくるのを待つ。

肌寒い空氣にもう少し厚着の方が良かつたと感じながら隣を見る。そこには僕のサーヴァントが座っている。今回の事で色々とわかつたことがある。

僕のサーヴァントは冬木の聖杯のサーヴァントではないと言うことは薄々感じていた。恐らくはムーンセルとなんらかの関わりがある僕にムーンセルのサーヴァントが召喚されたのだろう。まあ、思いもしなかつたやつだけど……

アーチャーの反応を見るに、僕のサーヴァントは靈体化していると冬木市のサーヴァントに気取られないようだ。まあ、多分気配とかは感じるのは思うんだけどね。

それでもこのアドバンテージは大きい。普通ならサーヴァント同士は靈体化していても認識出来る。だがその前提条件が覆つたらどうなる？奇襲を行つたりするのにとても便利だろう。

まあ、それは僕にも言えることだけど。恐らく靈体化している冬木市のサーヴァントを僕のサーヴァントは認識できない。極力桜と離れないほうが良さそうだな。

桜のライダーならそういういた奇襲に対処することは可能だろう。されるとなるとアサシンくらいじゃないと……まあ、それでもコードキヤストでどうにか出来るんだけど

” ”

「ん？僕のキヤラが違うって？何言つてんのさ。あの時の僕は8歳だつたんだ、そりゃあ成長くらいするさ」

” ”

「まあ、お前たちと会つてなかつたら傲慢でどうしようもない奴だつたろうけどね。」

” ”

「何笑つてるんだよ……」

視線を空へ向ける。真っ暗な空に少しだけ星が見える。街の灯のせいで見える数は少ないけど……

そういえば桜に連絡してなかつたと思い出し、携帯を取り出してコールする

『……もしもし』

ワンコール目で出た。というよりも、声からして怒っているようだ。連絡遅れた事に腹を立てているのか……

「ああ、桜。今日はちょっと帰れそうにないからさ、夕飯は冷蔵庫にも入れておいてくれないか？明日の朝にでも食べるからさ」「…それは、いいんですけど…理由とか教えて貰えませんよね…」

ああ、心配してたのか…まあ仕方ないか、学校の近所で殺人事件が発生してるし、連絡もなく帰つてこなければ誰でも心配するか。相変わらず甘いやつだなと思いつながらも、理由を話してやる。別に話してはいけない内容ではないからな。

衛宮がサーヴァントに襲われたこと
衛宮がサーヴァントを召喚したこと
衛宮と遠坂と一緒に教会にいること

要点をあげるとこの3つだが、随分と濃い内容だ。
事実、桜も驚いてるし

「それでさ、衛宮の家に上がる時にお前と喧嘩したって言つちやつてさ。そこのところよろしく」

『はあ…わかりました。これからは早めに連絡を頼みますよ？兄さん』

「わかつてゐるさ」

そう言い、電話を切つて閉じた。

そのタイミングで教会のドアが開く音がした。視線を向けると遠坂がこちらへ向かつてきている。

凛とした佇まいに僕の目の前まで来ると、こちらを一瞥してその口を開いた

「一応あんたにも言つておくわ。今夜やつとサーヴァントが7騎揃つ

たから聖杯戦争が開始されたわ」

「（丁寧に）どうも。それでどうするんだい？ 今から一戦やるつもり？」

僕の言葉に遠坂は少し不満気な顔をし睨んできた。

おいおい、本当にやるつもりなのか？ まあ、構わないけど

今の状況で有利なのはこちらだ。向こうは殆ど情報を仕入れていない状態で、こちらは相手の手の内を深い所まで知っている。

月の聖杯戦争での僕と相手の状況をそのままひっくり返した状態だ。

違うのは、マスターの力量に差が無いことくらい。

その状況で敗れたのは能力的には勝つていた僕

それだけ情報つてのは重要だ

「……今はやめておくわ」

「そうかい」

少しは考える事が出来るようだ。まあ、流石にこちらが遠坂のサーヴァントについて知つているとは思つてもないだろうけど

遠坂は僕と少し間をあけてベンチに座つた。少し苛ついてるように頬杖をついて教会のドアを睨んでいる。

その後ろには怪訝そうな顔でこちらを見るアーチャー

靈体化はしないのか？こちらが変な動きをした時に動けるようにしてるとか……

こつちのサーヴァントは靈体化してゐるつてのに変な話だ。

「そう警戒するなよ、アーチャー。今は遠坂を攻撃するつもりはないから」「……」

だんまりか。

ん？ 何か嫌な予感がする

「ほう？ 何やら複数人の気配を感じたから出てきてみれば、懐かしい顔ぶれだな」

普通に外に出てきていいの？ 英雄王。確かに隠れてるはずだつたよね？

「貴様は!!」

何やらアーチャーが驚いている。まさか英雄王のことを知つているのか？

つてか、ジャージ着てる英靈つてどうかと思う。
遠坂も突然のことに驚いてるし

「ふん、我に向かつて何たる言い草。斬首ものだぞ。まあよい、今宵は氣分が良いのでな。寛大なる我に感謝しろよ？」

「いきなり出てきてなによ！ あんた！」

「凜、下がつていろ。こいつはサーヴァントだ！」

「うそ!？」

まあ、確かにこの姿はそうは見えないよね。どこかのヤンチャな青

年つて感じだし

「ふん、口うるさい女だ。そこらの犬つころの方がまだ可愛げがあるものよ。」

「なんですって!!」

本当に何しにきたんだよ。僕にはまつたく考えもつかないことを考へてるといふのはわかる。いつもいつも愉悦というものに振り回されるこつちの身にもなってくれよ…

「と、お前たちの相手をしている場合ではない。さて、行くぞシンジ」「へ？」

「先程ハーレーが完成した。あのフォルム、よもやあそこまで甘美なものに仕上がるとは…玩具の域を超えて宝具と言つても過言ではない！」

「過言だよ!! っていうか何? そんなことで出てきたの? お前」

「そんなこととは何だ。喜べ貴様らに一番に見せてやるのだ。桜がないのは少々残念だが、あいつが不幸なのはいつものことだ。悔しがるだろうさ」

絶対悔しがらないだろ。寧ろ変わつてほしいんだけど!

「さあ、行くぞ!!
「わ、離せつて!!」

担ぎあげられて改めてこいつが英靈だとわかる。こんな安々と人を持ち上げる奴が一般人にいるわけがない

遠坂達は担ぎあげられる僕を見て呆然とこつちを見ている。

見ていてないで助けてくれよ
つか、お前も笑つてないで助けろよ!

”

”

いや、確かに英雄王は楽しそうだけだぞ！

”

ああ、もう!!

同盟

衛宮士郎は困惑していた。教会内で言峰綺礼より聖杯戦争の事を知られた後、先に出ていた遠坂凜と間桐慎二を待たせるのも悪いと考え、足早に出口へ向かい、ドアを開けた。

そこにいたのは、頭に手をおき何故か憤慨している様子の遠坂凜。なにやら警戒心丸出しのアーチャーの2人だった。

まず最初に疑問に思つたことは間桐慎二の姿が見えないこと。その次に遠坂凜の様子について

間桐慎二の事は遠坂凜が知つてているのだろうと考え、問おうと近くがすぐにその足を止めた

(今遠坂に聞くのはまずい気がする。かといって、遠坂のサーヴァントが答えてくれるはずもないし…)

苦笑いを浮かべ、その光景を眺める衛宮士郎、その後ろで何が起こっているのかがわからず困惑するセイバー

そこはかとなく混沌と化してきた空気を切り裂いたのは遠坂凜だつた

「ん？もう話は終わつたようね」

衛宮士郎がいることに気付いた遠坂凜は表情を戻すと衛宮士郎に近付く。

アーチャーは周囲を警戒しつつ遠坂凜の後ろに陣取る。

衛宮士郎は遠坂凜の切り替えの早さに苦笑いを更に浮かべ、遠坂凜に近づいた

「ああ、終わったよ。」

「そ、じやあ今から私達は敵同士というわけなんだけど…一つ問題が

「出たのよね」

「問題?」

言葉を一つ紡ぐ度に少しずつ不機嫌になつてゐるのを感じ取る衛宮士郎は冷や汗をたらりと流して問う。

「慎二の奴が何処かの陣営と手を組んでいる可能性が出たわ」

「慎二が?」

「ええ。さつきサーヴァントが現れて、こちらを散々貶した後に慎二を担いで何処かに行つたわ」

その言葉を聞き、更に困惑する衛宮士郎。

(そう簡単にサーヴァントが姿を見せるものなのか?)

タイミング的にも色々とおかしいだろうと心中呟く士郎は視線をアーチャーへ向ける

「そのサーヴァントってどんな奴だつたんだ?」

「何で、私の方を見ないのよ…まあいいわ。教えてあげる」

(あまり遠坂に喋らせて機嫌を悪くしてほしくなかつたんだけどな)

「金髪に赤い目、随分と高圧的な態度で一人称はオレ。服はジャージを着てたわね。」

果たしてジャージを着ているサーヴァントはいるのだろうか……そう考えたが、すぐ横にいる雨合羽を着た自身のサーヴァントがいる事に気付き、いるだろうなと衛宮士郎は結論づけた

「武器見れたのならクラスくらいならわかるだろうけど……あと気づ

いた部分といえば、強者の雰囲気というか今セイバーから感じてる物の強化版と言えばいいのかわからないけど。何か感じたわ」

全くもつて意味がわからんと腕を組み唸る土郎に対し、そのサー
ヴァントは心当たりがあるらしく、しきりに唸つている

「どうかしたの？ セイバー」

「いえ…一心当たりがあるので…」

「本当に!?」

セイバーに詰め寄りその肩を乱暴に掴む遠坂凜に困惑するセイ
バー。今まで警戒していたアーチャーはこの光景に深くため息を吐
き、視線をセイバーへ向ける。

「え、ええ。ですが一つ良くわからないうことが…」

「どうしたの？」

「もしその男が私の想像している男なら、召喚されるクラスは恐らく
はアーチャーです。ですが既にここにアーチャーがいるので…」

たじろぎながら説明したセイバーに遠坂凜はその手を離し、顎に手
をやり思考する。

通常ならありえないことが既にこの聖杯戦争では起こっている。
2騎のセイバーが存在しているのだ
もしかしたらアーチャーも2騎なのかもしれない。

「もしかしたら当たつてるかもしれないから教えて頂戴、場合によつ
てはある提案をするわ」

「はあ…」

セイバーは視線を衛宮士郎へと向け、どうするかの意を確かめる。
それに衛宮士郎は領き、俺も聞いておきたいと言った。

「では言わせて貰います。私が想像しているのは英雄王ギルガメッシュ。前回の聖杯戦争でアーチャーとして参加していました。」

「セイバー、貴方前回の聖杯戦争に参加していたのです？」

「ええ。まあ詳しくは言えませんが。ギルガメッシュの戦闘スタイルは多数の武器を射出して攻撃する中遠距離型です。」

「なるほど、だからアーチャーなのね。」

「はい、ですがその武器が厄介なのです。」

「厄介？」

「全て宝具なのです。」

「は？」

セイバーの言動に口を開け言葉を無くす遠坂凛
いまいち意味がわからずに頭を傾げる衛宮士郎
予想していたのか、ため息を吐くセイバーにただそれらの光景を眺
めているアーチャー

「な、なんて奴よ！反則にも程があるでしょ！」

「確かに強力なサーヴァントでした。だからこそもし、その男が英雄王なら苦戦は間違いないでしよう」

「…そうか、違う可能性もあるものね」

「いいや、あれは英雄王だ。」

今まで静観していたアーチャーが口を開く。その物言いに一体
どういう事が遠坂凜が詰め寄り、アーチャーに問う

「君も感じていたのだろう？凜。奴の発するカリスマ性のオーラを：
アレほどのものはそうそういうものじやない。そしてあの傍若無人
ぶりは十中八九英雄王で間違いない」

「…嘘じやないでしようね？」

「ああ」

遠坂凜はとうとう肩を落とし、深い深い溜息とともに衛宮士郎へと視線を向けた

「慎二が手を組んだ以上、その英雄王が敵つてことになるわ。流石に2騎の強力なサーヴァントを相手にこちらが1騎で戦うのには無理がある。そこで…」

「俺達も手を組むということか？」

「待て凜。その男のような未熟者と組んでもこちらにメリットは少ないぞ」

「いいのよ。確かに腕は素人。魔術も投影と強化くらいしか出来ないマスターだけど、仮にもセイバーのマスターよ？ 戦力にはなるでしょ」

「はつきり言うのな、だけど一つ疑問があるんだけど」

「なにかしら？」

「慎二は俺を助けたんだ。その慎二がわざわざ俺達に敵対するとは思えないんだけど」

その言葉に遠坂凜は再度ため息をはき、呆れたと呟き更に口を開いた

「あのね、あの時の衛宮君はまだマスターでは無かつたでしょ？ だから慎二があんたを助けたのだと思うわ」

「なるほど、それは一理ある」

「もし慎二のやつがこちらに敵対する意思を持つていなかつたとしても、最悪の場合を考えて動いたほうがいいのよ。わかつた？」

「つまりは、もしかしたら慎二が味方になる場合もあるということか？」

「まあ、それはそうだけど。結局手を組んでも最後には戦わないといけないのは忘れないことね」

その言葉に衛宮士郎は、ああと返事し同盟の申し出を受けた
2人のサーヴァントは少し不満気だつたがギルガメッシュの力量
を考え自身を納得させた

会談

「で、僕を連れてきた英雄王様はいつたいどういうご用件で？」

いつもの部屋に連れて来られた僕はソファに腰掛け、機嫌を悪くしつつ肩肘着いて目の前で寛ぐ英雄王へと視線を向ける。

英雄王は相変わらずのドヤ顔で目の前にあるバイクの模型を眺めていた。これが先程言っていたハーレーなのだろう。見事に黄金色で統一されたフォルムに英雄王らしい拘りを感じる一品。確かに出来は凄いけど宝具になるわけがないじゃないか

「まあよいではないか。王の戯れに付き合うのも家臣の役目なのだとわかっていよう？」

横には笑みを浮かべて緑茶を啜る聖杯戦争の監視者。先ほどまでの衛宮たちとの会話に愉悦を感じたのだろう。どことなく上機嫌だ

「僕は家臣になつた覚えは無いんだけどね。」

英雄王はそう呟く僕に満足気に頷いている。僕はそれを見た後湯呑みにお茶を注いでいる神父へと目を向けた

「で、あれはいつたいどういうつもりなんだい？」

「あれとは？」

「ランサーだよ。あなたのサーヴァントだろ？どうして一般人の衛宮士郎を襲わせたんだ？」

僕の言葉にふつと笑い湯呑みを傾ける。やっぱこいつ腹が立つな

「あれはランサーが勝手にやつたこと。私の意思ではない」

「どうだか」

嘘か本当かわからないのがこいつの厄介な所だ。まあいい、こいつへの口撃は殆ど無意味だ。効果的なのは

「まあ、次に変なことしたらアンタの麻婆豆腐が甘くなるだけだしね」

その言葉に麻婆神父は咳き込み、静観していた英雄王はニヤリとその口角をあげた。

こいつに効果的なのは英雄王をこちらの味方に付けること。英雄王が愉悦に感じ、なおかつ麻婆神父に被害が出る話題が出れば自然と追い詰められる。

「それは些かやり過ぎではないか？ 麻婆豆腐とは辛くあるべきのものだ。それを甘くなど」

” ”

「よいではないか。我也賛成だぞ？ なんなら今すぐ用意してもいいくらいだ」

やはり英雄王もあの真つ赤な麻婆豆腐には思う所があつたのだろう。すごく嬉しそうだ

「お戯れを」

「王の戯れに付き合おうのが家臣じやなかつたつけ？」

僕の言葉にグウッと唸り、言葉に詰まる麻婆神父。こんな姿は中々見ることが出来ない。

「良い事を言うではないかシンジ。自身の言葉には責任を持つべきであるぞ？ 言峰。犬が帰つて来次第買いに行かせろ。なに、糖類をほんの20kgほど買いに行かせれば良い。我的宝具で1人前の麻婆豆腐に見合う量へ圧縮してやる。」

愉悦部の活動とは、愉悦を楽しむ事である。

そのためになら部員を愉悦の対象にすることも厭わない。

桜以外の愉悦部員はその日、夜通し騒いでいた。

記憶

『怖くて逃げたのは臆病だけど、情けないことじやない。ちゃんと現実を見てた証拠だよ。』

はつ、言うじゃないか。あの時は情けない奴だとは思つたけど。少し見なおしたよ

『誰もおまえに期待してないんだから、どんな失敗をしてもいいじやないか！うらやましいかぎりだよ！』

期待…か。やっぱり子供のお前には重かつたのかねえ

『僕はさ、記憶を残したかつたんだよ。誰にも超えられない記録を。僕がいた証として』

……そう…か。あんたは残したかつたんだね…私とは正反対だ

『僕、頭おかしくない？なんだつてアイツらのためにここまでやるワケ？そんな借り、まつたくないんですけど！』

そうだね。表での小物臭い悪役ではないね、今のアンタは。悪者になりきれないわけだよ

『なにやる気になつてんだよ。痛み止めとか飲みはじめてるし。僕つてこんな馬鹿だつたのか？』

ああアンタは馬鹿だね。まあ、私はそんな馬鹿は嫌いじやないけどねえ

『自分が殺されるのと世界が殺されるの。どつちが怖いかなんて考え

たコトもなかつたし、考えたくもなかつたけど…………どつちにしても終わるつていうなら……やつぱり、こっちの方が大切だよねえ。』

本当にアンタに何があつたんだい？まるで正義の味方のようじやないか。どおりで悪になりきれないわけだよ

『はっ、そうだよ、その通りだよ！僕は子供で、ワガママで、他人のコトなんてどうでもいいさ！』

『僕だつて弱者をいたぶるのは大好きだ。けど、アレは自分の実力あつてのもので、借り物の性能とか白けるにもほどがある。』

『ほんと――――チート行為とか、虫唾が走るぐらいキモいんですけど！バークバーク！あとバーク！』

確かに、アンタは私の宝具の性能を知っていたから反則行為を使えば1回戦程度勝ち抜けたかもねえ。

それにも、あんな連中を相手にそこまで啖呵切れるなんてね。随分とかっこいいじゃないか

『はは……リアルに体が消えていくのは、気持ち悪くて、吐きそうになる。もう、その機能もないワケ、だけど』

死ぬのは誰だつて怖いだろうさ。表でのアンタも今のアンタも同じこと思つてただろうねえ

でもさ、その気持ちつてのは違うんじゃないかい？

『そうだよ、スゲーむかついてるよ。今でもおまえなんか嫌いだよ。』

『……でもさ、おまえ、泣いたじやん。』

『そうだよ。あんな事でよかつたんだ。』

『聖杯戦争で優勝する、なんて記録は残せなかつたけど――――――それぐらいは、残つたんだなつて。』

ああ、残ってるさ。アンタのやつたこと、アンタ自身の事は残った
さ。

『おまえがここで消えたら、誰も、僕のために、泣かないじゃん？ そう思つたら、仕方ないなあ、つて』

『……本当に、怖くて、イヤだつたけど。じめてのトモダチ、だつたし。』

よく考えたら、リアルな、は

自分勝手だからこそ、他人のために行動するってやつかい？魅せる
じゃないか

『すごい記録じゃなくて————僕のために泣いてくれたヤツ
が————残つて、くれるなら————』

『おまえがつまんないヤツでも―――――思い出す、誰かを――――残さなくちやつ、て――――』

『だから――――――――

「おまえには、残つていて—————」

アンタはこのまま消えていいのかい？

本当にアンタはそれで満足かい？

アンタがやりたいことなんでも言つてやりなよ。

それくらい強欲なくらいじやないと私のマスターが務まるはずがないだろ？

ほら、行つておいで。私がなんとかしてやるからさ

安心しな。私を誰だと思っているんだい？

だから、こんどこそ……

——僕は、僕自身が生きた証を残す

「精一杯生きな、シンジ」

あれから数日が経過した。遠坂は学校にいる間こちらを警戒していたが、桜に目が行かない事を考えて放置していた。

問題としては何処かのサーヴァントが魂喰いをしていると言う事。魂喰い：サーヴァントが現界している際に必要な魔力が不足している場合に補う為の裏ワザ。

今の状態ならまだ放置していてもいいけど、度が過ぎるのなら考えなければならない。

ライダーには何があつても桜を守るようには言っているし、何かあれば報告するようにも言っている。

アーチャーはうつかりやの遠坂

セイバーはお人好しの衛宮

ランサーは麻婆神父

ライダーは桜

この4騎は今のところは障害になり得ない陣営だ。
問題は残りの3騎

バーサーカー

キヤスター

アサシン

バーサーカーは記憶にある。ギルガメッシュが戦っていた記憶があるのだ。灰色の巨人としか情報がないようなものだけど

まあ、今回は英雄王の力を借りることは出来ない。だからこそ、あの記憶を頼るのは良したほうが良さそうだろう。

まあ、残った2騎はいまいち情報がない。だけどおそらくはこのどちらかが魂喰いをしているのだろう。

マスターの力量に差がないのならばキヤスターが魂喰いをしているだろうが：

対魔術師との戦闘も想定しておくべきか。

もう聖杯戦争では油断はしない。僕の目的のためになんとしても

大聖杯にたどり着かないと…

◇

” ”

僕のサーヴァントは告げた：気をつけろ、敵が来る…と
場所は人通りのない住宅街。しかし、そんな所で戦闘でもしたら一
般人への被害は免れない。

戦闘は避けるべきだな

僕はこの前完成した劣化版携帯端末を取り出し魔術を発動させる

「view_map()」

敵を捕捉。サーヴァントの反応はあるが姿は見えない。

マスターの姿は子供、参加者の候補の中ではアインツベルンあたりの者か。

” ”

ああ、名家故に強力なサーヴァントの可能性は高いだろう。初見で
挑むには厳しい相手だろうね。少し戦闘してもいいかも知れないけ
ど、深追いは避けるべきだ

逃げるのには賛成だよ。

「move_speed()」

移動上昇のコードキャストを付与。急いで離脱する。

「あ～あ、逃げられちゃつたか。まあいいや。こつちはついでだつた
し」



特に追つてくる様子もなく、普通に帰宅した僕を桜は出迎えてくれ
た。

最近色々と動いてるから帰宅時間が遅くなる僕が心配だそうだ。
まあ、仕方無いことはいえ少しは気をつけようと思う。

そう考え、居間へ向かおうとすると、突然電話が鳴った

相手は衛宮。そう言えば随分昔に交換してたつけ？でも変だな、あ
いつなら携帯でかけてきそうなものを

「はい、もしもし」

『もしもし、慎二？』

「遠坂？衛宮の番号だつたんだけど」

『それも順を追つて説明するわ。急ぎの用事とかはある？』

「まあ、特に用事らしい用事はないけど、早くしてくれよ？・桜が怒つて

くるから」

『わかつたわ。单刀直入に言うけど、衛宮君を救出するのを手伝ってくれないかしら?』

「……いったいどういうことだよ」

『さつき衛宮君がバーサーカーのマスターに攫われたようなの。こつちはセイバーとアーチャーがいるけどバーサーカー相手には少し厳しいの』

まつたく、何やつてんだろうね。衛宮は

「セイバーがいて何で攫われたんだ?」

『衛宮君、一人で買い物に行つたらしくて。』

間抜けじゃないか。本当に大丈夫か?

「まあ、わかつたよ。衛宮が馬鹿だつてことはね。で、僕に手伝うメリットはあるの?」

『私の宝石を一つあげるわ』

なるほどね、確かに悪い取引じやあないか…でもさ

「僕、宝石魔術使えないの知ってるだろ?」

『そうだけど、他にいいものなんてないのよ。』

こんなカードで交渉なんて、片腹痛いつたらないよ

「交渉決裂。衛宮救出は勝手にやつてくれ」

『そう…残念だけど他をあたるわ』

遠坂はそう言つて電話を切つた。まつたく、もつと交渉術を磨いた
ほうがいいよ

「……兄さん」

” ”

イライラしている僕に気付いたのか、少しオドオドした様子で桜が声をかけてきた。つて、僕のせいじゃないよね？文句は言わないでくれよ

「先輩が、誘拐されたんですか？」

……どうやら聞かれていたらしい。まつたく、遠坂ももう少し声を小さく言つてもよかつたろうに、桜にまで聞こえるなんてね

「そららしいね。まあ、僕には関係ないけど」

嘘だ。本当は関係大有りだ。桜を悲しませない為にも衛宮は助けるべきだろう

でもさ、動く理由が無いんだよね

「……兄さん」

おいおい、そんな目で見てくるなよ。僕が悪者みたいじゃないか。

「なあ、桜一つ頼まれてくれないか？」

「……なんでしょうか」

ため息を吐いて頭をかく。あーあ、本当に面倒くさいな

「晩飯冷蔵庫に入れといて。少し出かけてくるから」

「兄さん！」

うわあ、すつごい嬉しそうな顔

「言つとくけど、衛宮を助けに行くわけじゃないよ?」
「はい! □」

何で嬉しそうなんだよ。お前も満足気に頷いてるんじゃないよ。ほ
ら行くぞ

「帰りは朝になるかもしれないから、今日は早めに寝るんだぞ? 桜。
あとライダーも桜を任せた」

「わかりました。桜のことは安心して任せて下さい」

当然のように現れるライダー。いつも桜の後ろを陣取つてゐるから
わかりやすいな。まあ、他のマスターが居る場合は近くにはいなけ
ど

「じゃあ、行つてくるよ」

本当に面倒くさい。まああれだ

このまま放つておいたら桜が行つちやいそうだしな。それだつたら本末転倒だし、意味がないしね。まあ、理由はいくらでも並べられるけどさつさと行こうか。

「v i e w _ m a p ()」

遠坂たちの向かう方角は……AINツベルンの森?

宝具

意外にも呆気なく衛宮士郎を奪還できた遠坂凜、セイバー、アーチャーは衛宮士郎を含めた4人でアインツベルンの城を突き進んでいた。

そして、4人は開けた場所…エントランスへと辿り着いた。

「……」

「出口よ、どうやら間に合ったみたいね。」

明かりの灯るエントランスに人の気配はなく、ただ不気味な静寂が広がっているだけだつた。

「出口って言つても、ここつて正面入口だろ？一番目立つていうか、大胆つていうか。」

「相手が留守にしてるんだから最短距離を一氣に行つたほうがいいでしょ？ほら、行くわよ」

確かに、そういう考え方もあるだろうが、それを実行する遠坂の胆力には驚くよ

と内心咳く士郎は、階段を降り始めた凜に続き降りていく。

しかし、出口に向かう途中…丁度階段を降り終わつた所で足音がエントランスに響いた。

「なんだ、もう帰っちゃうの？せつかく来たのに残念ね」

その声は、確かに留守にしていたはずのイリヤスフイールの声だった。

それを聞いた士郎達は足を止め、声の方向…エントランスの階段の上へと視線を向けた。

「イリヤ…スファイール」

冷や汗を流す凛は、確かめるようにその名を呟く。自分たちはイリヤスファイールが城の外へ出る所を見た筈だ。戻つてくるにしては早過ぎる

そう思いつつ、警戒心を高めていく凛に対し、イリヤスファイールは不敵な笑みを浮かべて士郎たちを見た

「こんばんわ。貴方の方から来てくれて嬉しいわ、リン。」

「……」

「……? どうしたの? 黙つていたらつまらないわ、折角時間を上げているんだから遺言くらいは残したほうがいいと思うな」

その言葉に更に冷や汗を流す。イリヤスファイールが一人ならば特に問題はなかつた。しかしそれはありえない

イリヤスファイールの近くには必ず、サーヴァントであるバーサーカーがいるのだから

「そう…じゃあ一つ聞いてあげる」

相手に内心を知られぬように去勢を張る。それでもしないと恐怖心に負けてしまうかもしれないから…逃げるチャンスを失うだろうから…

「イリヤスファイール。あんたが戻ってきた気配は無かつたけど、もしかしてずっと隠れていたのかしら?」

精一杯の不敵な笑みを浮かべてそう答える。思い出すのは教会の神父、大嫌いな人物を思い出しつつ去勢を張る凛に対しイリヤスファイールは特に挑発に乗つたりもせずに答えた。

「そうよ。私はどこにも行つてないわ。ここから貴方達の道化を眺めていただけ。」

ここまで聞かされたのならば嫌でもわかる。士郎たちはまんまと罠にかけられたのだ。

「外に行つたのは偽物なわけね」

「ええ。私はこの城の主なんだから、おもてなしをしなきや」

そして、その場を支配する威圧感。数日前に味わつたその感覚に士郎たちは気付く

「お客様に」

バーサーカーがやつてくるのだと……

バーサーカーは降つてくるように現れた。その片目を赤く光らせて唸り声をあげる巨体に士郎たちはたじろぐ。

「もう話すことはないかしら？」

今にも突っ込んできそうなバーサーカーの様子に自ずとその口を閉じいつでも動けるようにする。

そんな士郎たちの様子を見て、イリヤスフィールは、無いみたいね。と呟くと不敵な笑みを浮かべて右手を顔の横まで上げた。

「誓うわ、今日は一人も逃さない。」

あの右手を下ろせばたちまち鎖に繋がれた猛獸は解き放たれ、自分たちへと向かってくるだろう。

セイバーはせめて士郎に逃げるよう伝え、自身が足止めをすると付け足した。しかし、魔力供給を受けることも出来ず、先日のバーサー

カ一の一撃で手負いとなつてゐるセイバーは、その痛みに苦悶の表情を浮かべる

「そんなこと、出来るわけがないだろう。」

「しかし……」

そんな二人の様子を見た凛は視線をバーサーカーに向けながらアーチャーへと話しかけた。

「アーチャー、聞こえる？ 少しでいいわ、一人であいつの足止めをして」

「遠坂……！」

「馬鹿な！ 正気ですか！ 凜。アーチャー一人でバーサーカーの相手など」

言われなくともそれくらいは承知している。そう内心呟いた凛は自分たちはその隙に逃げると付け足した。

その様子を見ていたイリヤスファイールは、少し笑い声を上げた後に言い放つた

「言つたじやない。誰一人も逃さないって。貴方達4人は勿論。あと2人もね？」

あと2人？ 一体誰が…士郎の頭に疑問がよぎった時だつた。

「…なんだい？ 全く。少し散歩をしてたらこんな大勢に出くわすなんてね」

入り口を開けて一人の男が入ってきた。

その顔には粘着性のある笑みを浮かべ、手はポケットに入れ、カツ

ンカツンと足音を立てて士郎たちの方へ歩いてくる。

髪はワカメのようゆらゆらと動いているその人物は、まごうことなき慎二だった。

「慎二、来ててくれたの？」

「勘違いするなよ？僕はたまたま散歩をしていて、たまたまサーヴアントの気配を感じたからここに来たんだ」

見え透いた嘘を言う慎二に凜は苦笑し、それ以上は言及しない。

慎二が意地つ張りだと言うのは既に理解しているのだ。今更とかく言うべきではないと考えた凜は、再度バーサーカーへ視線を向けた。

「でも、正直あんたが来た所で戦況は変わらない。あんたにとつて、とつとと逃げたほうが良かつたかもね」

慎二は深く、深くため息を吐いた。

そして頭を搔いて、視線をバーサーカーへと向ける。

「何勘違いしてるんだよ。僕はお前たちと共闘しに来たわけじゃない。ただバーサーカーを倒しに来ただけだから」

「慎二、今は意地を張つている場合じゃ！」

そう叫ぶ士郎を見て鬱陶しそうに顔を歪めた後にこう言い捨てた

「正直お前たち邪魔なんだよね。とつととどつか行つてくれない？」

それを聞いた凜は少し顔をしかめた後、士郎の手を引いて走りだす。

「遠坂！」

「行くわよ！衛宮君！」

セイバーはすぐさま2人の後を追い、走りだす。

慎二は彼らを見送った後、その場に残つたアーチャーへと視線を向けた。

「お前もとつとと行つてくれないかな？ここにいられると正直やりにくいんだけど」

アーチャーはその言葉に少し驚愕した後に、皮肉めいた笑みを浮かべその口を開いた。

「餞別だ、聞くといい」

アーチャーは視線を鋭くさせ、バーサーカーの上の天井へと剣を投げた。

剣は天井にささり、天井は瓦礫となつてバーサーカーの目の前に降り注ぐ。

バーサーカーはそれを気にも止めずに慎二を、いや、その隣に佇む存在へと視線を向けていた。

「あのバーサーカーの真命はヘラクレス。十二の試練という名の宝具で身を守られている。生半可な攻撃が効かない上に、回数に制限はあるが、蘇生する。」

自身の記憶のそこにある情報を風変わりなかつての友へと告げたアーチャーは瓦礫が崩れ落ち切る前にその姿を消した。

慎二は特に感謝するわけでもなく、ただ邪魔者がいなくなつたと理解し、眼前の敵へと視線を向けた。

「くだらない茶番は終わつたかしら？なら早く殺してくれる？凛達

を仕留めなきやいけないから」

バーサーカーの威圧感に内心はビビりまくつてもいる。だがしかし、それでも慎二は冷や汗を流す事もなく、ただ漠然とした態度でイリヤスファイールと相対する。

ここに来る前に決めていたことが一つある。自身のサーヴァントと決めたことだ

「正直、お前みたいな化け物を相手にする気は無かつたんだけどね」「そう? ならどうしてのこのことやつてきたのかしら?」

「簡単な話だよ。お前と僕は聖杯戦争における敵なんだ。敵を倒すために来ただけだよ。僕は」

「へえ、士郎たちを助けに来たわけでもなく?」

「あいつらがどうなろうと知ったことじゃないね。ただ僕は、偶然出会つた化け物を倒しに来たんだから。」

「……さつきから化け物化け物つて…」

両者の様子は間逆だ。片方は絶大な力を持ち、内心余裕を持つているが怒りを顔に出し

もう片方は異端な力を持ち、内心恐怖心と不安感を持つているが、それを表に出さない。

慎二は馬鹿にするような笑みを浮かべて言い放つた

「お前、今回の聖杯の器なんだろ? 知ってるよ
「な!!」

驚愕。先ほどまでの余裕は露と消え、あるのは驚きと怒り。

イリヤスファイールは感情の荒波を激しくさせながら、慎二へと問う

「どこでそのことを?」

「少し物知りな王様に教えてもらつてね」

慎二は眞面目に答えていない。そう感じてしまうイリヤスファイールは既に冷静ではない。

慎二是眞実を述べたのだ。ただ、イリヤスファイールにはそれがわからぬだけである。

「わかつたわ。貴方はどうしても死にたいようね。バーサーカー!!」

イリヤスファイールの声に反応して、その眼光を鋭くさせて慎二を睨みつけるそれに、慎二はため息を吐いて、あるトリガーをセットする。

「簡単に挑発に乗ってくれるのはありがたいけど、切れやすい女子は怖いな」

「やりなさい！バーサーカー!!」

バーサーカーが慎二へと迫る。

それはあまりにも早くて、慎二の命を刈り取ろうとする。

「告げる。」

しかし、バーサーカーの動きが止まった。

言い知れぬ違和感を感じたバーサーカーが攻撃を止めてしまったのだ。

それは間違いで、バーサーカーは違和感を氣にもせずに攻撃すべきだった。

「令呪を持つて命ずる。その宝具を——

——開帳せよ

今、トリガーモードが引かれた。

再会

令呪によるブーストにより、繋がりが強くなつたことが感じられた。これなら問題なく”召喚”できる。

僕は、自身のサーヴァント。いや、岸波白野の器へと指示を送る。

これより、SERAPHへのアクセス権行使。その身に岸波白野の意識を定着させた後、サーヴァントの召喚を行う。

僕のサーヴァントはサーヴァントといえない存在だ。ただそこにあるだけで意識は別の場所…SERAPHにある。

このサーヴァントが出来る事といえば一つ。ムーンセルへアクセスすること。

それには魔力が必要となり、僕くらいの魔力で、やつとりミッターのかかつた状態のサーヴァントを1体召喚出来る。

しかし、その魔力に比例しアクセス権は絶大になる。

相応の魔力であればムーンセル・オートマトンの使用も出来るとのことだ。

さらにもう一つわかっていることはある。

岸波の意識は僕にはつながつていて、それを通してサーヴァントへ指示を送ることも可能だとということだ。前回召喚したセイバーは弱体化しているものの、岸波の指示によりランサーと打ち合っていたのだ。

眼前には魔力のブーストに少し戸惑つたバーサーカーの姿が見える。だがすぐにこちらへ攻撃してくるだろう。でも、もう遅いんだよね

岸波の器が現界し、僕達の目の前に魔法陣が展開される。

魔法陣から発せられた光に目がくらむ。その大きすぎる光はエン

トランスを照らし、ほのかな暖かさが感じられた。

そして現れたサーヴァント

【剣を携えた男装の少女】

【赤い外套に身を包んだ武人】

【妖艶な半獣の女性】

そして――――――

「…久しぶりだね。岸波」

「ああ、久しぶりだよ。慎二」

【学生服の少年】

目の前に4体のサーヴァントが召喚された。

「慎二」に一つ謝つておくよ。エリザベートとライダーをあの短時間では見つけることは出来なかつた。俺と繋がりのある3人で精一杯だつたよ

「別にそれくらいなら怒らないさ。」

気にしなくともいいさ、居ないからといって困るわけでもない。まあ、居てくれたほうが楽だつてのは確かだけどさ

「何よ、いつたいあなたのサーヴァントは何者よ!!そんな高ステータスのサーヴァントを複数召喚するなんてありえないわ!!」

まあ、確かに反則臭いけどさ。こつちは令呪を消費しなきやこんな召喚は出来ないんだよ?これにも時間制限はあるんだし

そんな情報はわざわざ言わないけどさ。

「再会出来るのは思つても見なかつたけどさ、取り敢えずはあのサー
ヴァントをどうにかしないとね」

「ああ、そうだな。慎二…いや、マスターは何か策があるか？」

「マスターはよしてくれ。まあ策としては、僕が相手マスターを足止めして
いる間にバーサーカーを倒してくれ。その端末に不備はないだろ
う？」

「確かに、寧ろ以前の物よりも高性能だよ」

「なんたつて英雄王製だからね。色々とぶつ飛んでるのはわかるだろ
？」

「それもそうだな。」

「氣分が高揚する。声は届いていたけど面と向かつて話しているわけ
でもなかつた。

「再会出来るのは思わなかつた分、感じるものは大きい。

「何故サーヴァントを召喚出来たのかはわからないけど、もう一つ解
せないわ。何故リンのアーチャーがいるのかしら？さつきよりも高
ステータスになつて」

「なに、簡単な話だ。私とあの者とは器は同じでも別人なのだよ。そ
れにマスターも違うときた。ならステータスに多少の差異は出ても
仕方あるまい」

「意味分かんない。まあいいわ、確かに貴方達は強いようだけど私の
バーサーカーには敵わないんだから！」

「アインツベルンの言葉に苦笑しつつも岸波はサーヴァント達に目
を向けた。

「というわけで、召喚されて早々だけど、目の前のサーヴァントを倒し
たい。協力してくれるか？」

「うむ！奏者の為なら余は力を使うことは惜しまないぞ」

「ああマスター。今一度君の為にこの身を剣として戦うとしよう」
「正直私一人でも十分ですけどね！玉藻ナインの次は赤い皇帝に赤い
正義の味方ですか。真っ赤っ赤ですね。本当に、あまりお痛はいけま
せんよ？ご主人様」

僕は3体のステータスを確認する。岸波のステータスによつて強
化されている3人はアインツベルンが驚くほどのステータスを持つ
ているようだが：

【セイバー】

マスター：岸波白野

筋力：A+

耐力：A+

敏捷：A+

魔力：A

幸運：A+

【アーチャー】

マスター：岸波白野

筋力：A+

耐力：A+

敏捷：A+

魔力：A+

幸運：B

【キヤスター】

マスター：岸波白野

筋力：B

耐力：B

敏捷：A+

魔力：A+

幸運：A+

確かに凄まじいステータスだ。

これが月の聖杯戦争の優勝者のステータスなのか。

で、肝心の岸波の方は

【マスター】

マスター：間桐慎二

筋力：E

耐力：B

敏捷：E

魔力：B+

幸運：A++

どうやら岸波はイレギュラークラスのようだ。まあ、確かにやることはマスターのそれだけだ。

ステータスは中々なもの。異様に幸運が高いようだ。

「じゃあ、3人で協力するのは初めてだけど、精一杯やろうか」

バーサーカーは岸波に任しておいて……

「こちらも始めようか。アインツベルン」

「私を倒せると思つているのかしら？」

「流石にそこまでは自惚れては居ないけどさ。あんまり裕かましてると、足掻われるぜ？お前

「なにを…」

「shock (64)」

「ぐつ!!」

僕の魔術を喰らつちゃったね。甘く見てるからだよ。

対サーヴァント用だからさ、マスターには強力なんだよね。
しかもマヒ効果付き。これならどんな魔術を使うにしてもろくに
使えないだろうさ

「いつたい…何をしたの？」

驚いた。意外に話せるんだ。威力は高めのはずだけど

「お前の知らない魔術だよ。僕が作つたわけじやあないけど、魔術師
相手には有効的だろ？」

「でも…まだまだ…甘い」

鳥が現れた。

恐らくはアインツベルンの魔術。媒体は髪…か

こちらの媒体は劣化版携帯端末だけだ。これに気づかれないと
は上手くやれるだろう。

それにしてろくに身体が動かない状態でよくやるよ。

それくらいは認めてやるかな

「さて、気張るとするかな」

V S 狂戦士 前編

眼前に揃う3体のサーヴァントに改めて感じる圧倒的な安心感。そして同時に大変だということを思い知らされる。

一人でも散々振り回されていたのに、三人も集まつたらどうなることやら。ここにAUOも入れば更にカオスになることは間違いないだろう。そこはかとなく不安になるが、今はそもそも言つてられないか。

俺達の前にいるバーサーカー。この世界のアーチャー曰く生半可な攻撃は通らないらしい。具体的なものはないけど、牽制は殆ど意味を持たないと見てもいいだろう。ならば、早々に準備をしなければならない

「アーチャーは投影準備をしつつバーサーカーの足元へ攻撃して体制を崩してくれ。隙があれば赤原獵犬で耐力の低下を狙つて欲しい。」

セイバーは遊撃をしつつ相手へのダメージを感じてくれ。通るようであれば燃え盛る聖者の泉を、通らないようであれば時を纏う聖者の泉を発動させてくれ。

キヤスターは呪相炎天と密天で攻撃をしつつ相手の動きの観察。攻撃は食らうなよ？セイバーが燃え盛る聖者の泉を発動したならば継続、時を纏う聖者の泉を発動したならば呪相吸精と氷天を発動させて相手のガードのブレイクを狙つて。

後は全員宝具が発動できそうなタイミングの報告を頼んだ
「了解した、マスター」

「余の華麗な剣舞に酔いしれるがよい」
「いつもながらに素晴らしい指示ですよ。ご主人様」

三人が動き出したのを確認しコードキヤストを発動させる。

ここには回復アイテムがないけれど、以前よりも増えた魔力量で力バーができる。

しかも、この端末のお陰で俺が使えるコードキヤストだけでなく、

他のマスターとかのコードキヤストも使用できる。まあ、流石に一足一倒のようなコードキヤスト（物理）は使えないけど

「g a i n — c o n (3 2) — l c k (3 2) — m g i (3 2) — s t
r (3 2)」

高速詠唱。複数の魔術ですら殆ど同時に発動することが出来た。これはサーヴァントとしての固有スキルの恩恵だろう。

かけた対象は

アーチャーへ l c k
セイバーへ c o n , s t r
キヤスターへ m g i

ステータスが高い三人だけど更に底上げすることで戦力を増加さらに

「a d d — r e g e n (3 2)」

体力の自動回復を入れておく。まだまだ魔力には余裕があるな。見たところ、あのバーサーカーは狂化しているため、スキル封印は必要ないか。

「たあ!!」

アーチャーの弓の一撃により、少し体制を崩したバーサーカーにセイバーが襲い掛かる。上段からの振り下ろし、真紅の大剣が灰色の巨人を切り刻む

「固いな！打ち碎く!!」

特にダメージを与えられなかつたようで、アーチャーによる牽制の後に大振りの一撃を狙うセイバー。しかし、相手はアーチャーの牽制を気にもとめずにその大剣：いや、巨剣を振り下ろしてきた

「させない！shock（64）！」

巨体はコードキャストに一瞬動きを止められ、その隙にセイバーの大振りが命中する。

「離れろ、セイバー」

アーチャーがセイバーへ声をかけ、セイバーはそれに従いバックステップをし、俺の目の前まで下がる。

「喰らいつけ、フルンデイング!!」

「気密よ、集え！」

セイバーの攻撃により、怯んでいたバーサーカーへ赤原猟犬と密天が命中する。

更に攻撃の体制を取るアーチャーとキヤスターを横目にセイバーへ相手の様子を聞く

「確かに手応えはあつたが、まるで効いておらぬな。」

「やつぱり高火力が必要か…セイバー、手筈通り頼む。その後は相手の攻撃を捌いて時間を稼いでくれ」

「うぬ!!罪科の剣よ、ここに！」

次いでアーチャーへ視線を向けて指示を送る

セイバーには少しの間足止めをしてもらうとしよう

「アーチャー、貫通攻撃！」

「了解した。我が骨子は捻れ狂う…カラドボルグ!!」

これなら…ダメージ通つたな。胸に穴が空いている。しかし、まだ攻撃の手は止められない。回数制限があるとはいっても、蘇生するらしい

からな。まったく、どんな化け物サーヴァントだよ

「アーチャー、宝具の方は!?」

「もう少しで発動できる」

「ご主人様、私が血も凍る、大宴会を開いて差し上げます」

どうやらキヤスターは準備が出来たようだ。

「よしキヤスター、宝具を発動後、最大火力を叩き込んでくれ

「了解しました!!」

「g a i n | s t r (32)」

キヤスターの筋力を上げて火力の底上げをする。

「セイバー！ 戻つてこい！」

「うぬ!! 星よ駆けよ!! 余は奏者が、大好きだ―――!!」

いきなり星馳せる終幕の薔薇ぶつ放した!! 今戻つて来いつて言つたよね!!

「ご主人様への愛は誰にも負けません!! とくとご覧あれ

ここは我が国、神の国 水は潤い、実り豊かな中津国 国が空に水注ぎ、高天巡り、黄泉巡り 巡り巡りて水天日光 我が照らす、豊葦原瑞穂の国 八尋の輪に輪を掛けて、これぞ九重天照 水天日光天照
八野鎮石」

なんだろうか。無性に恥ずかしくなってきた。今つて真剣に戦つてるんだよね?

「諦めろマスター。君には女難の相EXという固有スキルがあるだろう?」

確かにそうだけどさ

才能

「余は奏者が、大好きだ——!!」

まつたく、気楽なもんだよね。こつちは攻撃を避けるのでいっぱいいっぱいなのにさ

「くつ、ちょこまかと！」

まだ少しスタンが効いているのか、狙いが甘いのが幸いだ。身体を捻り剣の形をした魔術を躊躇する。

さて、ここまで魔力を使ったのは最初の魔術にだけ：令呪のブーストで一時的に使用不可になつた回路、23本は正常に動いていることが確認できる。

「そろそろこちらからも行かせてもらうよ。move — speed

()

「いま!!」

僕の魔術展開とともにこれまで以上の魔術を放ってきた。全く詠唱や予備動作無しなんて反則だろ。

まあ、見えているのなら問題はない。剣の間を縫うように動き、相手の懷へ飛び込み、思い切り地面を踏みしめる。

「なつ！」

「はつ!!」

肘打ちを鳩尾へ打ち込む。魔術への対応はしても武術まではしていらないだろう。

子供相手に使用するのは些か気がひけるけど、そうは言つていられない。

続いて顎へ掌底。間髪入れずに再度地面を踏みしめて腹部へ拳を打ち込んだ。

それにより相手はゴロゴロと転がるように吹き飛ばされた。

流石にあの外神父のように相手が水平に吹つ飛ぶことはないにしろ、暫くは動けないだろう。

今使用した技というか型は、愉悦部恒例行事の週1度の「体験？実験？マジカル八極拳！」とかいう英雄王が付けたふざけた名前の訓練のせいで身についたものだ。

因みに桜もそれには参加している。よく組手をしているが、あいつの場合は打撃時に手加減してしまっているため、あまり実戦では役に立たないだろう。それでも普通の大人になら勝てるだろうが

震脚、肘撃、崩拳の順で打ち出された技をともに食らうと洒落にならないくらいのダメージを負ってしまう。これで時間は稼げるが、

バーサーカーの方はまだ時間がかかりそうだ。

その隙に新しく魔術を使用してきてこつちが危なくなることも考えられる。更に布石を打たせてもらうか

『岸波！今のアクセス権レベルは？』

『慎二か。こつちはもう少しかかりそうだ。それとアクセスレベルは4だがそれがどうした？』

アクセスレベル4

僕のように魔術（コードキヤスト）を使用する程度のアクセス権はレベル1

これは端末と魔力を持つてさえいれば誰でも可能だ。

次に岸波との通話がレベル2

これは召喚した際に僕が手に入れたアクセス権だ
サーヴァントの限定召喚がレベル3

ステータスダウンと宝具の制限。さらに個体は1体というのを考えて付けられたアクセスレベル。

ダンジョンデータへのアクセスがレベル4

ここまでアクセス権を有するには僕の魔力が枯渇する程度は必要

A.I保管場所へのアクセスがレベル5

現在はこれは使用できない。もう少し早ければ使用できたかもしれないが現状必要のないアクセス権だ

サーヴァントの座へのアクセスがレベル6

令呪により使用できるサーヴァントの召喚。基地外みたいな魔力量ならこれを常時使用できるかも知れない。

ムーンセル・オートマトンへのアクセスがレベル7

僕の場合は令呪を3回使つても届かないアクセス権。万能の聖杯へのアクセスはそれ相応の魔力が必要

これが僕達が定めたアクセスレベル。令呪により一瞬だけレベル6が解禁。それからだんだんとレベルを低下させていくのが現状。だが、今一番必要なアクセス権はまだ使用できるようだ。

『ダンジョンデータへアクセスしてくれ』

『……あれを使うんだな?』

『ああ、念のためだけだ』

『失敗したら危険になるのはお前だぞ? 慎二』

『何を言っているのか。僕が失敗するわけがないだろ?』

『……そうだな、愚問だつたな。昔のお前でも出来たことを今のお前が出来ないわけがないよな』

『ああ、幸い相手は暫くは動けないだろうし、今のうちに温存しておいた魔力をフル解放するさ』

『一体何をしたんだ?』

『八極拳で吹き飛ばした』

『……』

なんだよ、その無言。

つと、ちゃんとアクセスはしてくれたようだな。目の前に魔法陣が

現れる。

さて、主力魔術回路32本中30本使用、残り2本はmove—speedへの供給に使用予備回路16本開放。身体への影響は…微弱といったところか。
問題はない
使用本数10本、6本はいつでも魔術を行使できるように開いておく。

さて、使用回路40本。ある程度の予測を付けた魔力量は確保した。あとはハッキング速度だけ。

まったく、相手の動きに注意しながらしなきやいけないのは中々骨だけど既に召喚してしまったんだ。やるしかないな

並列思考は出来るけど、所詮は適当に身につけた技能にすぎない。これならもつと真剣に練習しておくべきだつたと思いつつハッキングを開始する。

相手が床に蹲りながら唸つてているところを見る限り、まだダメージのせいで動けないようだ。

【ハッキング進行度18%】

さつき岸波が軽く言つたけど前回は補助と時間があつたから成功したところもあるつてのをあいつは知らないだろう。
まあ、だからといって今できない筈はないけど。

【ハッキング進行度43%】

大体のペースは1秒で6%の速度、回路が熱くなるのがわかるけどこの速度でのハッキングだ。仕方ない

【ハッキング進行度89%】

さあ、もうひと踏ん張りだ。相手は未だに唸つている。反撃への警戒は杞憂だったか

【ハッキング完了】

やれやれ、頭が痛いね。流石の僕でも疲れたよ

まあ、これで僕がやられる心配は無くなつたと言つてもいい。流石にサーヴァントのいないマスターに負けるほどこいつは甘くないさ。BBの補助による強化はないけど、数で補えばいいってのは安直だつたかもね。

さて、最後の仕上げだ

「合体しろ、シンジタンク」

3体のシンジタンクはお互いの部品を強化するように重なり合つていく。体積がえていくわけでもなくその強度を増していく辺り、こいつが魔力で出来たエネミーだつてのを実感する。

完成するのを見守りつつ相手マスターに目を向ける。多少はダメージが回復したのか、地面に這いつくばりながらシンジタンクを唾然と見ている。まあ無理もないか、唯できえ不利な状況が更に困難な状況になつたのだから。

「完成、シンジタンクMK2つてね」

今、最後の布石が打たれた

外伝【AUOは我儘】

「……勝つたぞ綺礼。この戦い、我々の勝利だ……」

突然聞こえてくる戯言、随分と昔に同じ言葉を聞いた覚えがある。今でも鮮明に思い出せるのはこの我が全てを忘れぬからであろう。しかしまあ、なんと品の無い。外見に似合わずその一声は優雅とはかけ離れたもの。それ故にこの下郎はあやつには及ばんのだろうな。自分自身すら見えておらぬわ。

「王よ、願わくば私めを貴方の配下とさせて頂けませんか？」

頭を垂れる人間が目の前に現れる。ふむ、中々様になつてはいる⋮少しばかり戯れに付き合つてやるのもよいと感じるだろう。以前の我ならの話だが⋮

視界に映るのは3人の人間。我を召喚した雑種と店主とその父親⋮店主の方は相も変わらず空虚な眼差しを浮かべておる。こいつの方がよっぽど我を興じさせるのには向いておるわ⋮

「王よ、どうか私めを」

「話すな雑種」

それにしてもこのマスター、つまらぬ。召喚するならば弓兵などでなくエクストラクラスでの召喚ならば認めてやつたかも知れぬ。もしくは、あやつのように我を認識するためだけに令呪の全てを投げ出すほどの気概をだな⋮

「……」

「……つまらぬ、貴様は我的マスターにはなり得ん」
「なにを」

目の前の男の首を切り飛ばす。全くもつてつまらん。視線を2人の男に移す。一人は酷く驚愕しおけぞつている。一人は驚愕しつつもその空虚な瞳は健在だ。

「さて、そこの男」

「……私、ですか？」

「貴様は目の前で師が殺されてどうするのだ？」

空虚な瞳が揺れる。これこそがこやつが凡夫では無いことの証明。今は自分の中にある冷静な心に疑問を持つていてと言つた所か：

「私は……」

言葉を詰まらせる。自身の本質を理解していないこやつには即答は難しいだろう。あやつならばなんと言うだろうな。我を前にしてどうする？と問われて困惑するのである。しかしそれでもあやつは最後には我を欲していたか：凡人でありながらその根底は非凡。何も出来ない程の弱者かと思えば劇物を喜んで食す強者たる者。あやつ程我を興じさせる者はいないであろうな。

しかしまあ、目の前の男も愉悦を感じるに足る人物。故に少しばかり温情を与えてやろう。

「質問を変えよう。今貴様の目の前にいるのは貴様の疑問を解消しうる存在だ。それを前にして貴様は何を成す？」

我的言葉にはつきりと驚愕したのがわかつた。先程の空虚な瞳ではない。本心で驚いているのだろう：

しかし、貴様ならばやる筈だ。さあ押せ、貴様ご自慢の自爆スイッチを！

「……令呪を持つて命ずる、自害せよアサシン…」

「綺礼、何を!?」

やりよつた。流石愉悦神父。我的期待を裏切らない。後で飴をや
ろうか…いや、飴はあやつの好物だつたか…ではこやつにはやはり
劇物か?

いや、やめておこう。あんなもの我見たくない。見るだけで舌痛く
なるし。無論あの生娘の劇物も御免こうむるが:

それよりも、折角期待通りの事をしたのだ。褒美をやらんとな

「良かろう。氣に入つたぞ、名を名乗れ」

「……言峰綺礼」

「では店 syōゴホン:綺礼。貴様はこの我、英雄王のマスターだ。
我を精一杯興じさせるがよい」

「ハツ!!」

「折角だ、そこの監視者。そこで倒れている者の令呪を我がマスター
へと移植せよ」

「し、しかし」

「二度は言わん」

「はい!」

少し宝具をちらつかせるだけでこの態度。やはり凡夫とはつまら
ぬな…

「ではマスター。我は少し用事がある。何かあれば連絡するがよい」
「わかりました英雄王」

取り敢えずバイクショップへ向かうか。待つていろ我エルキドウが愛車!!

外伝【AUOの慢心は何処へ行つた】

「聖杯に招かれし英靈は今ここに集うがいい!! 尚も顔見せを怖じるような臆病者は征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬ者と知れ!!」

相も変わらず豪快な男よ、だが我を前に王を語るとは許しがたい。どれ、一思いにその体躯を屠つてやろう…

「悔いて走ろ!! エルキドウ!!」

箱型の物を詰める物を飛び越え、世迷い言を抜かした肉達磨へと愛車エルキドウの前輪を振り下ろす。

「ぬお!?!」

チツ、避けたか。運の良いやつよ。しかしまあ、やはり愛車の働きと我的ドライビングテクニックは素晴らしい。地面に着地して尚、状態をぶれさせない。やはり我こそが王。何もかもをこなせるというのだ。

「いきなり不意打ちとは卑怯者か」

「何を言う肉達磨。貴様が我の通る道に立っていたのだ。我への侮辱として自害するのが当然だろうに」

愛車から降り、蔵へと仕舞う。

ふむ、何やら注目されているな……む?あの男我より高い所に立つてゐる。万死に値する!!

「死を持つて詫びろ、雑種」

「な!?」

「マスター!!」

ふむ。槍を持つた…恐らくはランサーのマスターであつたか。しかし、既にあのマスターは死んだろう。全方位から宝具を放つたのだ。まず助かるまい

「しかしまあ、よもや我を差し置いて王を語る愚か者が2人も現れるとはな」

「ふむ、いきなり現れ、いきなり一人のマスターを殺害する空氣の読めない貴様が言うことか」

「知らんな。王道とは我の歩んだ場所。我こそがその場の流れそのものだ……む」

ランサーが槍を突き刺してきたのを防ぐ。直ぐ様足元から宝具を射出し、相手の足を削つた。

成る程、少しばかりあの者に灸をすえねばならんかも知れぬ。あやつと行動していた余り、相手の行動を完封する癖が付いてしまつていいではないか……

私は油断はしないが慢心はする。それこそが王なのだ。故にこのような愚行を行つたあの者は再びあつた時に文句の一つでも言つてやらねば気がすまぬ。

「貴様、それでも英靈か!!」

「喚くな雑種。我を見下ろすという愚行を我自身が裁いてやつたのだ、感謝こそすれ怒りを表すなどありえん」

更に激昂し、ランサーが槍を振るつてくる。

つまらぬ。槍を振るい切る前に蔵の武具に貫かれたわ……。

「最速のクラスが聞いて呆れる。そこまで近づき、翻弄もせずに攻撃するからそうなるのだ」

血を吐き出すそれに吐き捨てる。

貴様の行いは雑種の中でもくだらぬ物なのだとわかりやすく説明してやつていいのだ。感謝しろよ

「貴様、随分とまあ自分勝手な男のようだな」「何を言う。王たる我が正しいのだ。有象無象に気を配るなど反吐が出来る」

「そこまで言うのだ、名乗りをあげたらどうだ？ 貴様も王たる者ならばまさか己の異名を憚りはずまい」

「我に問い合わせを投げるか……常であればその首、切り落とされる所だ。それに雑種風情に我的答えを理解できるとは思えん……いや、あの者は理解していたな。よし、貴様ら雑種の中でも底辺の奴に理解できるとは思えんな」

「で、貴様は誰だ？」

「我が拝謁の榮に浴して尚この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧生かしておく価値すら無い！」

「無茶苦茶だ!!」

喚くな、ライダーのマスターよ。よもや我の怒りに触れるのが本望とは言わぬだろうて

む？ 気付かなんだが、あの貧相な胸に金髪碧眼、セイバーか：

「何故でしょう、今無性にこの男を斬りたいと思いました」

「そう言うでない。貴様は我が寵愛を受けるに足る人材だぞ、セイバー」

「怒つたと思えば今度は女子を口説く、よくわからぬ男よのう」

「黙れ肉達磨。殺すぞ」

「ぬ？ 地面から黒い靄が…あれは確か…」

「バーサーカー!!」

「……あの騎士のよう在我の前に立ち塞がるか。それと何か？貴様も借金の取り立てでもすると申すか？」

宝具を展開し、射出…はしてはいけないな。確かこやつは我的宝具を勝手に使い出す。その行いは万死に値する……寧ろ我的宝具を誰が貴様なんぞにやるか。仕方あるまい……

「聞け、雜種共。我と相見える迄に雜種共を間引いておけ。我と戦うのは眞の英雄のみだ」

「つてことは、あのランサーは眞の英雄つてこと…」

「あやつのは唯の肅清だ。戦いなどとは言わんぞ、ライダーのマスターよ」

あれと戦うなど、あの狂犬と戦うのと同義だ。さぞ品のない争いとなるだろうな……